

2021(令和3)年度

兵庫県

NIE 実践報告書

「教育に新聞を」実践 高等学校編

- ◇NIE を活用した課題発見・課題解決能力養成のための探究活動
(兵庫県立神戸高塚高等学校)
- ◇SDGs の視点に基づく探究学習 ー課題発見と調査内容のまとめ方に NIE を活用するー
(兵庫県立兵庫高等学校)
- ◇「学びに向かう力」を育む新聞活用
(兵庫県立明石西高等学校)
- ◇新聞を活用した「地域社会学」への取組み
(兵庫県立西宮高等学校)
- ◇多様な価値観に触れ、社会の変化に対応する
(兵庫県立多可高等学校)
- ◇「やさしい日本語」新聞書き換え講座
(兵庫県立伊川谷高等学校)

「教育に新聞を」実践 中学校・高等学校編

- ◇小中一貫校での交流授業における新聞を活用した学びあいと2年間のNIEのまとめ
(愛徳学園中・高等学校)
- ◇新聞をより身近なものに ～情報科と探究活動の取り組みを通じて～
(蒼開中学校・高等学校)
- ◇続・新聞で教室を社会とつなげよう!
(神戸山手女子中学校高等学校)

兵庫県NIE推進協議会

探究活動とNIE～知ること、話し聞くこと、考えること、平和のために～

会長 秋田久子

2021年度の実践報告をお届けします。

実践校の皆様が学校の特性をふまえて企画し実践なさった記録です。ご一緒に、今後のNIE活動に生かしていきたいと思います。実践校の先生方、ありがとうございました。

さて、コロナも3年目。なかなか収束とはまいりません。2021年度も公開授業は実施できませんでした。公開授業参観は学ぶことの多い刺激的な機会です。学校の雰囲気や、児童生徒の取り組みの様子、先生方の導きとフォローの実際など、「学びの場」は様々な要因が混然一体となって作られていることが実感できます。それは自身の学校や児童生徒の特性の活かし方を考えさせる機会にもなっていたと思います。残念です。

そこで21年度は「公開授業発表」として実施しました。参観の長所はそのままに、録画した授業を参観して説明を直接に伺うものです。新聞を生かした「探究」活動の実際を、丁寧な解説と資料、質疑応答で大変分かりやすく知ることができました。

発表してくださったのは、兵庫県立神戸高塚高等学校・伊東琢磨先生と西宮市立浜脇中学校・渋谷仁崇先生です。

充実した「探究」活動に圧倒され、教員としてうらやましくも感じる中で、「探究」活動を活発にする私たちの立ち位置に気付かされました。

立ち位置について、伊東先生は「ファシリテーターたれ」と仰いました。探究の第一段階から第二段階への誘いには、縦横からの多面的な「つっこみ」が有用だとおっしゃいました。「答えられないのはラッキー、学びにつながるから」と探究を深めさせていかれます。渋谷先生は「教員がしゃべりすぎないことだ」とおっしゃいました。生徒が主体になる「NIEノート」をベースにしておられました。

通常の授業では教卓から自分の知っていることを生徒に分かりやすく伝えようと私たちは努力していますが、探究ではまず生徒の興味や疑問に共感を示して、適切な「つっこみ」をいれながら伴走するのが大切だと分かりました。探究方法や発表・評価の段取りについても、事前の共有が生徒の意欲をそだて、学校としての活動の定着にもなることを教えてくださいました。

高本正道・兵庫県立神戸高塚高校長先生、そして辻村隆・西宮市立浜脇中学校長先生のご挨拶からも、学校全体の理解が勢いを生むことを感じました。

NIEで社会を知り、話し聞き、考える・・・児童・生徒達の将来も平和であり続けるために、しっかりと息長く活動しようと思いました。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

<目次>

巻頭言 「探究活動と NIE～知ること、話し聞くこと、考えること、平和のために～」	
兵庫県 NIE 推進協議会会長 秋田 久子……………	1
2021 年度兵庫県 NIE 実践指定校	…………… 4
【小学校】	
新聞から広がる世界 ～これ、みつけたよ！おもしろいね～	
伊丹市立天神川小学校……………	6
社会に目を開き、自分の考えをもち、発信できる子供の育成	
神戸市立大沢小学校……………	10
新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう	
～自分の興味・関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～	
神戸市立淡河小学校……………	14
新聞を通して、社会への関心を高める取り組み	
尼崎市立立花南小学校……………	18
「読む」「感じる」「伝え合う」力の育成をめざして	
養父市立宿南小学校……………	22
【中学校】	
NIE ノートを通して、見える世界と関わる自分	
～SDGs 教育プログラムの実践、万博 EXP02025 を見据えて～	
西宮市立浜脇中学校……………	28
未来を切り拓き、生き抜く資質・能力の育成	
兵庫教育大学附属中学校……………	32
新聞を活用した情報リテラシー教育実践	
神戸市立神陵台中学校……………	36
新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る	
尼崎市立南武庫之荘中学校……………	40

NIE 活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成

加古川市立志方中学校……………44

【中学校・高等学校】

小中一貫校での交流授業における新聞を活用した学びあいと2年間のNIEのまとめ

愛徳学園中・高等学校……………50

新聞をより身近なものに ～情報科と探究活動の取り組みを通じて～

蒼開中学校・高等学校……………54

続・新聞で教室を社会とつなげよう！

神戸山手女子中学校高等学校……………58

【高等学校】

NIE を活用した課題発見・課題解決能力育成のための探究活動

兵庫県立神戸高塚高等学校……………64

SDGs の視点に基づく探求学習 ―課題発見と調査内容のまとめ方にNIEを活用する―

兵庫県立兵庫高等学校……………68

「学びに向かう力」を育む新聞活用

兵庫県立明石西高等学校……………72

新聞を活用した「地域社会学」への取り組み

兵庫県立西宮高等学校……………76

多様な価値観に触れ、社会の変化に対応する

兵庫県立多可高等学校……………80

「やさしい日本語」新聞書き換え講座

兵庫県立伊川谷高等学校……………84

【特別支援学校】

新しい視点で社会を見つめる ～特別支援学校における新聞を使った取り組み～

兵庫県立播磨特別支援学校……………90

【2021 年度兵庫県 N I E 実践指定校】

通常枠 20 校（◆は継続校 ◇は新規校）

〈通常枠〉 小学校 5 校

- | | |
|-------------|-------------|
| ◆伊丹市立天神川小学校 | 伊丹市荒牧南 |
| ◇神戸市立大沢小学校 | 神戸市北区大沢町中大沢 |
| ◇神戸市立淡河小学校 | 神戸市北区淡河町荻原 |
| ◇尼崎市立立花南小学校 | 尼崎市三反田町 |
| ◇養父市立宿南小学校 | 養父市八鹿町宿南 |

〈通常枠〉 中学校 5 校

- | | |
|---------------|--------------|
| ◆西宮市立浜脇中学校 | 西宮市宮前町 |
| ◆兵庫教育大学附属中学校 | 加東市山国 |
| ◇神戸市立神陵台中学校 | 神戸市垂水区神陵台 |
| ◇尼崎市立南武庫之荘中学校 | 尼崎市南武庫之荘 |
| ◇加古川市立志方中学校 | 加古川市志方町志方町宮山 |

〈通常枠〉 中学校・高等学校 3 校

- | | |
|----------------|------------|
| ◆愛徳学園中・高等学校 | 神戸市垂水区歌敷山 |
| ◆蒼開中学校・高等学校 | 洲本市下加茂 |
| ◇神戸山手女子中学校高等学校 | 神戸市中央区諏訪山町 |

〈通常枠〉 高等学校 6 校

- | | |
|---------------|-------------|
| ◆兵庫県立神戸高塚高等学校 | 神戸市西区美賀多台 |
| ◆兵庫県立兵庫高等学校 | 神戸市長田区寺池町 |
| ◆兵庫県立明石西高等学校 | 明石市二見町西二見 |
| ◆兵庫県立西宮高等学校 | 西宮市上甲東園 |
| ◆兵庫多可高等学校 | 多可町中区東山 |
| ◇兵庫県立伊川谷高等学校 | 神戸市西区伊川谷町長坂 |

〈通常枠〉 特別支援学校 1 校

- | | |
|-------------|-------------|
| ◇県立播磨特別支援学校 | たつの市揖西町中垣内乙 |
|-------------|-------------|

【 小 学 校 】

新聞から広がる世界

～これ、みつけたよ！おもしろいね～

伊丹市立天神川小学校 校長 津田 康子
実践代表者 渡邊 奈美

1. はじめに

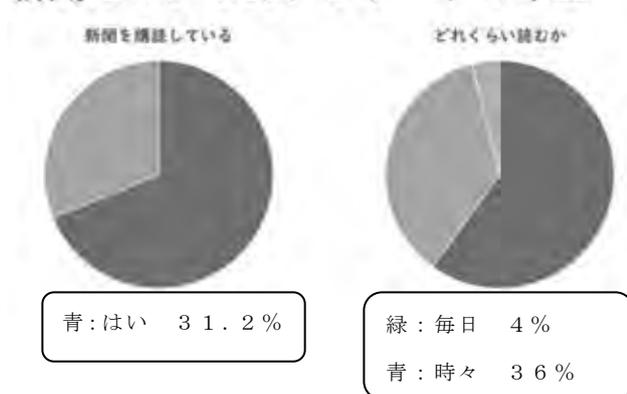
本校は昭和 32（1957）年創立の学校で、現在は児童数 704 名の伊丹市内では比較的大きな学校である。地域としては、伊丹市の北部に位置し、住宅が増える中にも、所々には田畑があり、伊丹荒牧バラ公園を校区にもつ自然豊かな地域である。学校教育目標を、「命輝き笑顔あふれる天神川小学校」とし、心豊かで意欲的に学び合う子どもの育成を目指している。

また、今年度は 2 年目の実践ということで、子どもたちに昨年度よりも新聞について親しみをもった上で、社会への視野を広げる機会になって欲しいという願いから、テーマを設定をした。

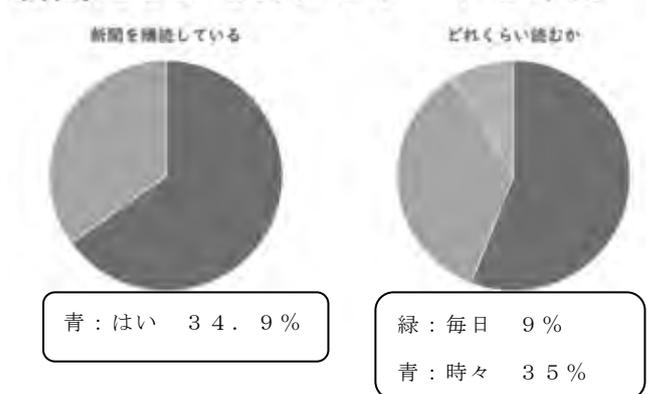
今年度、本校の 4 年生・6 年生に対して新聞の購読のアンケートを行った。本校では、新聞を購読している家庭は少なく、学校で初めて新聞に触れる児童も少なくない。新聞を購読している家庭は 4 年生の家庭で 31.2%、6 年生の家庭で 34.9%と 40%にも満たない。また、新聞をどれくらい読むか 4 年生では「毎日読む」は 4%、「時々」は 36%、6 年生は「毎日読む」は 9%、「時々」は 35%であった。関心はあるものの毎日読んでいる率は少ないが、学年が上がると関心が増えているように感じられた。

以上が、本校における現状となっている。

新聞についてのアンケート 4 年生



新聞についてのアンケート 6 年生



2. 本年度の実践内容について

①NIE コーナーの設置

実践校となった昨年度は、児童が自由に新聞に触れる NIE コーナーを設置することから始めた。校舎の渡り廊下に新聞を置いたり、おすすめの記事を掲示したりした。校長室前には、毎日一面を中心に掲示する「NIE コーナー」をつくり、児童が社会のニュースに触れる機会をつくった。この取り組みは、2 年目の現在も続けており、廊下を通った児童が、新聞記事について「これ知ってる！」や「見て見て！」と、友だちや教員と語る場面が昨年度に比べて多く見られるようになった。



< 渡り廊下の NIE コーナー >



< 校長室前の NIE コーナー >

②記者派遣事業

昨年度同様、本年度も記者派遣事業を行った。本年度は、神戸新聞の三好記者より、5年生の児童に向けて「見出しの作り方」について授業を行っていただいた。昨年度、4年生で国語の学習で新聞作りを行った際に「どうしたら読み手にわかりやすい見出しが書けるのか。」ということに児童が悩むことがあった。今回、新聞記事は「大事なことから書く逆三角形のかたちであること」「5W1H を入れること」を含め、見出しの作り方をはじめとした新聞の記事の書き方を教わるすることができた。児童にとっては、昨年度自分自身が困った経験から、今年度、改めて見出しの付け方を教わることで、新聞の奥深さを実感した授業になったようである。

また、児童全体を見ると、普段家庭で新聞を取っていないけれども、より身近に新聞を感じたと感想を書いている児童が多かったことも大きな成果だと感じた。



< 児童の感想の一部 >

- ・クイズ形式で学び、見出しが重要なことがよくわかった。
- ・分かりやすい見出しをつけるのは新聞社にとって大変な仕事だと感じた。
- ・今日の学習でわかった事は見出しのつけかただ。見出しはできるだけ言葉を短くし、読む人が読みたくなるようにつけるということがわかった。新聞にはたくさんのひみつがあることがわかった。

③新聞作成の授業の様子

昨年度は、神戸新聞の「ことまど」を使い、気軽に本格的な新聞作成を行うことが出来た。また、今年度は、エクセルを使い、同じような新聞作成を行った。エクセルの決めら

れたセル内に見出しや記事を打ち込んでいくと新聞の様な仕上がりになるように設定されたものである。

この「ことまど」やエクセルファイルを使った新聞作りは、複雑な新聞作成に気軽に取り組みやすいことや、自分の表現の修正・工夫が行いやすいことが利点としてある。そのため、自分の伝えたいことを書く際に、読み手を意識して伝えるために簡単に何度も修正が行えることや、新聞の形に整い、達成感を味わうことで意欲付けがしやすいということも見られた。



また、4年生の国語の新聞作りでは、教科書の新聞の構成と実際の新聞紙面を比較して、読み手に伝えたいことをわかりやすく伝えるための工夫を学習した。また、昨年度の記者派遣事業の記者の方の話も思い出しながら新聞作りに取り組むことが出来た。「本物」の新聞や「本物」の記者の話は、児童の新聞に対する関心を高めることに、大きな役割を果たしていると感じた。



④ワンページポートフォリオ作り

昨年度、「ことまど」で新聞作りを行った6年生は、「ワンページポートフォリオ」というA4用紙1枚に写真や文字を効果的に使って、表現したいことを伝える学習を行った。この学習では、新聞の作成の学習で身についたことが大いに役立てられた。



- ・ 今までの見出しの付け方や写真の選び方、レイアウトの工夫を活かして作成に取り組む
- ・ どうしたら短く、わかりやすく伝わるかを考えて作成

⇒ 制限された字数で、伝えたいことを要約して表現する力がついた。

⑤特別支援学級での取り組み

本校の特別支援学級でも、新聞を取り入れた活動を行っている。学習活動の中に、コグトレ（学習の土台となる認知機能を強化するトレーニングを取り入れている。その中で、コグトレ棒というものを使った活動がある。コグトレ棒とは、自分の体を知ることや、ものをコントロールする力をつける棒である。この棒の作成に、新聞を利用している。また、新聞紙で座布団を作ったり、スリッパを作ったりと新聞を情報を得るものとしてだけでなく、身近に活用出来るものとして取り入れている。



3. 終わりに

天神川小学校の2年間の実践を通して大きな成果が得られた。

新聞に対する関心という部分では、「興味をもち、身近なものとして捉えることができるようになった。」「本やインターネット以外にも情報を得るためのツールとして活用をすることができるようになった。」「生活にも使える道具として利用できる。」といった、3つのことが子どもたちの中に芽生えてきているのではないかと感じた。

また、子どもたちについて力という部分では、「自分の伝えたいことを、読み手を意識して書く力。」「制限された字数で、伝えたいことを要約して表現する力。」「必要な情報を選び、伝える力。」という3つが挙げられると考える。

2年間の実践を通して感じたことは、児童にとって新聞が十分身近で役立つものとして認識されたのではないかとということだ。

今、私たちの社会では、沢山の情報があふれている。その中でも、「本物を見抜く力」というものは一朝一夕で身につくものではない。何度も情報の取捨選択を行い、いくつもの試行錯誤を経て身についていくものである。そのため、たくさんの経験をすることが子どもたちには必要になってくる。今回、私がNIEの実践の取り組みを行っていく中で感じたことは、「本物を見抜く力」を育てることにNIEの実践が大きな役割を担うのではないかとということだ。「読む」ことで、知識を得て情報の真偽を確かめるための手段になることや、相手への物事の伝え方を学び、「書く」ことで相手の立場に立って簡潔にわかりやすく伝えることを学ぶ。そして、得た情報を「使う」ことで、新たな情報を得る手段となっていく。これからも、身近にある新聞を活用していくことで、社会への視野を広げ、未来を担う子どもを育成していきたい。

社会に目を開き、自分の考えをもち、 発信できる子供の育成

神戸市立大沢小学校 校長 長崎 康子
職名 福崎 雅也

1. はじめに

本校は農村地域に位置し、令和5年度には開校150周年を迎える歴史ある学校である。地域の方は、母校である本校の教育を支えようという熱い思いがあり学校への期待も大きい。

子供たちは、1クラス10数名の少人数の中で、のびのびと生活している。クラス替えもなく互いをよく知っている仲間である。言葉を十分に交さなくても分かってくれるだろうという安心感があるためか、表現力が十分とは言えない。また、多様な考え方に触れる機会も少ない。

子供たちには、相手に分かるように言葉で伝える力や、多面的な見方・考え方、将来たくましく生きていく力を育てることが教師の願いである。

そこで、指定校1年目は、「社会に目を開き、自分の考えもち、発信できる子供の育成」を研究テーマとして掲げ、できることから取り組むこととした。

2. 実践内容

(1) 新聞を手にとって

①新聞に親しむ

新聞は、5・6年生の教室前の廊下に置き、いつでも手に取れるようにした。休み時間などに興味のある記事を読む子供が徐々に増えていった。

低・中学年においては、コウノトリ、宇宙、オリンピック・パラリンピック、SDGsなど教科学習に関する記事や子供たちの関心のある記事などを教室に常掲するようになった。

新聞を眺めながら友達との会話が弾む様子も見られ、新聞を読むことへの関心は高まったように感じる。

②新聞を比べる

5年生は、社会科の学習の中で、同じ日の4社の新聞の一面を比較した。新聞によってトップ記事が違う。見出しも違う。トップ記事が占める割合も違う。何日間か比較することで、各社それぞれに記事の取り上げ方に違いがあり、意図をもって掲載していることに気付いた。

そこから、「実際に記者のお話を聞いてみたい」「どんな意図をもって記事を書いているのか知りたい」という思いがふくらんだ。そこで次に述べる「記者派遣」の学習につないでいくこととした。

(2) 記者派遣事業

～ニュースって楽しい！～

産経新聞神戸総局の入沢亮輔記者に来ていただき、5年生を対象とした学習を行った。

第1部は、「新聞記者ってどんな仕事？」をテーマに入沢記者の話を聞いたりクイズ形式で記者のかばんの中身を想像したりした。「暑い日も寒い日も取材のためにじっと立ったままということも」というお話に記者の仕事の大変さを想像していた。



一方で、「自分の知りたいと思うことを調べることができ、それをみんなに伝えることは楽しい。」と聞き、記者としてのやりがいを感じ取っていた。

第2部では「記者体験をしてみよう」と実践的な学習をした。

まず、入沢記者が「好きなこと」について担任の先生に取材する様子を見せていただいた。次々に話を聞き出していく様子に「さすが」と子供たちは感動していた。さらに驚いたのは、休憩の10分間でその内容を記事に仕上げられたことであった。

また、記事にする時には、「いつ・どこで・誰が・何を・へえ、そうなんだ」を入れることが大切だということを教えていただいた。「へえ、そうなんだ」と記者自身が驚いたり面白かったと感じたりするよう内容を取材で聞き出すことで、よい記事になることが分かった。その際、聞きながら次の質問を考えておくこととスムーズなインタビューになるということも教えていただいた。



早速子供たちが実践した。2人一組で「好きなことを」を取材し合ったが、メモが追いつかなかったり、次の質問を考える余裕がなかったりと苦戦したものの、記事にすることは予想以上にスムーズにできた。スクリーンに映し出した入沢記者の記事が手掛かりとなり、それを見習いながら時間内に全員が書き上げることができた。

「詳しく書けたね」「面白い記事だね」「うまく話を引き出せたね」と、本物の新聞記者から自分の書いた記事についての講評をいただけたことも貴重な経験となり、子供たちは大変満足そうであった。

「友達の知らない面を知ることができて楽しかった」「新聞に興味が出て読みたくなった」「これから新聞を読む時には、いつ・どこで・誰が・何を・へえ、そうなんだを意識して読もうと思う」といった感想が子供たちから出された。



この実践を行うにあたって、事前に入沢記者と何度も打ち合わせをしたことがよい活動につながったと感じる。教師がねらいとすることや子供の実態を記者に知ってもらったうえで、何ができるか検討した。記者と担任が役割分担をすることや、2部制にして子供たちの集中力を持続させるようにすることなどは、打ち合わせの中から生まれた案である。また、配慮を要する児童への支援方法も事前に伝えるようにした。

記者派遣事業は、記者の方にお任せする活動ではない。記者と学校とが共に創り上げていく活動であると再認識した。

(3) 新聞を作ってみよう

5年生児童は、米の観察記録や、国語科の伝記を読んだ感想などを新聞記事の形式にしてまとめた。その際、入沢記者から教えていただいた「いつ・どこで・誰が・何を・へえ、そうなんだ」を意識しながら新聞を作成した。作成には、一人一台パソコンを使った。写真を取り込んだり、文字の大きさを変えたりと工夫して作成していた。作った作品を共有するなどICT活用にもつながった。



4年生児童も、実際の新聞を参考にして、壁新聞を作成する学習活動を行った。

1枚の模造紙の割付けをグループで相談し、記事を分担して作成することとした。記事を書く際には、「大見出し」「小見出し」を意識するようにした。実際の新聞を大いに参考にすることとなった。できた記事を張り合わせ、さらに見やすく工夫して仕上げていった。

出来上がった壁新聞を見合い、どのような新聞が見やすいか改めて気付くことができた。



(4) 震災学習

① 写真パネルを見て

全校生が神戸新聞社の震災の写真を見学した。1年生にとっては初めて見る写真が多く、担任が「このときはね…」と自分の体験も交えながら1枚1枚説明した。子供たちは多くのことを感じ取りながら黙って写真に見入っていた。



① 記者のお話を聞いて

神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーが講師を務め、体験談を交えながら「自分と家族、友達を守ろう」と全校生に呼び掛けた。

大震災当日、神戸・三宮の本社で宿直勤務だった三好アドバイザーは当時の写真を見せながら、「激しい揺れで窓ガラスが粉々に吹き飛んだ」「発生時刻に起きていたので助かったと思う」と振り返り、「あの日から27年がたとうとしている。大切なのは記憶を語り継ぐことだ」と話した。

また、「各地で豪雨災害などが相次いでいる。災害知識を身につけないと命を危険にさらすことになる」と強調した。

学習後に書いた子供たちの感想文には、「阪神・

淡路大震災の被害について知らない人に伝えたい。」「6,434 人が亡くなったことを知って怖くなった。災害に対して恐怖心をもちたい」と書かれていた。1年生の感想にも「地震は急に起こるからこわい。」「もうだれも死んでほしくない。」と書かれていた。「命の大切さ」を感じ取ることができた学習であった。



3. 成果と課題

今、新しい学習指導要領のもと「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。

入沢記者と学習した取材体験は、相手との対話の中から驚きや面白さを聞き出していく活動、つまり主体的に自ら追求めていく活動であり、それが非常に楽しかったという経験となった。まさに今求められている自ら学び取る教育を体現でき、非常に意義のある学習であったと感じている。記者と何度も打ち合わせをしたことでよい活動となったことに感謝している。

また、三好シニアアドバイザーによる震災学習では、実際に震災を経験した方のお話を聞くことで知

らなかった事実がたくさん出会うことができた。阪神・淡路大震災の話だけでなく、その後も日本の各地で起こっている自然災害について触れていただいたことで、子供たちは「自分ごと」として災害をとらえることができた。知らなかった「社会」に目を開くことができたと感じる。

さらに、新聞づくりを通して、自分の考えをもち、それを発信する方法を工夫する姿も見られた。

研究テーマである「社会に目を開き、自分の考えをもち、発信できる子供の育成」という点においては、まだまだ課題はあるものの、活動を通して大きく前進できたと感じている。

教師の工夫次第で、教科学習と新聞をリンクさせることはいくらでもできると感じた。子供たちに社会に目を開かせることを目指すとすれば、まずは教師が社会に目を開きたくさんのことを感じ取ること、そしてそれを子供たちにどう出会わせるか創意工夫すること、その創意工夫を教師が楽しむことを目指すことからではないか。

次年度は教師の個性ある工夫がさらに発揮できるような学習活動を展開していきたい。



新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう

～自分の興味・関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～

神戸市立淡河小学校 校長 黒井 陽子
教諭 藤岡 絵美

1 はじめに

本校は神戸市の北部に位置し、山々や田畑に囲まれた自然豊かな環境にある。児童は全校生が43名の小規模校である。

今年度はNIE実践指定校1年目ということと、家庭において新聞を読んでいる児童がほとんどいないという実態を踏まえ、まずは新聞の魅力を見聞に感じてもらうところからスタートした。校内の研修テーマは、「NIEを活用した言語力の育成と言語活動の充実」に設定し、全学年が教育課程の中で発達段階に応じた新聞活用の取り組みを行った。

2 実践の内容

(1) コーナー・新聞カフェの設置

新聞をより身近に感じることができるよう、全校生が毎朝通る廊下にNIEコーナーを設置し新聞を置いた。

そのコーナーの隣の部屋を「淡河新聞カフェ」と名付け、休み時間に新聞を読みたい児童はいつでも利用できるようにした。



淡河新聞カフェにて

NIEコーナーにて

(2) 新聞記事から学ぶ防災学習(1年生)

神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師に招き、静岡県熱海市で発生した大規模土石流の被害を伝える神戸新聞記事から「命の大切さ」を学んだ。記事を読むのはまだ難しいため、写真を見ることを中心に行った。

「ビルが泥で埋まっている。」「建物に人が残されている。」など気づいたことを発表したり、「ぼくも大雨のときは早く逃げようと思う。」と新聞から学んだことを伝え合ったりと、防災に対する意識を新聞を通して高めることができた。



(3) 新聞を使った造形遊び(幼稚園・1年生)

本校は幼稚園が隣接しており、幼稚園との交流を綿密に行っている。

幼稚園児と1年生がグループになり、協力し合って、建物作りに挑戦した。新聞紙を細く丸めて棒状にし、その棒を折り曲げたり切ったり、棒同士をくっつけたりしながら理想の建物を作りあげていった。園児と児童は、石垣を作成したり、自由自在に好きな形に変形させたりと、

新聞紙の色や紙の特性を生かしながら、互いに知恵を絞り合いながら完成させていた。



(4) 新聞を使った造形遊び (みんなの学級)

特別支援学級 (みんなの学級) では、新聞を使ったテント作りに挑戦した。テントの土台や柱を棒状に丸めて作り、広げた新聞紙を側面に貼っていった。児童は、新聞を読むことが好きだが、新聞を使用した違う楽しみ方ができることを知り、わくわくしながらテント作りに取り組んでいた。



立派なテントが完成。

(5) 新聞作り (2・3年生)

神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師に招き、低学年の発達段階に応じた新聞記事の作り方を教わった。見出しの付け方や配置の仕方などを教わった後、新聞記事の中から自分のお気に入りの記事を選び、その記事に感想や気付いたことなどを書きこみ、オリジナルの新聞を完成させた。

児童は新聞作りの知識を生かし、この授業以外の時間にも、係活動や生活科での学習発表会など、様々な場面において新聞作成を自主的に行うようになった。



2年生児童のオリジナル新聞。

二年生児童のオリジナル新聞。



(6) 新聞記事の紹介 (3年生)

NIE コーナーから、自分の読みたい新聞記事を選び、その記事を紹介する活動を国語の学習の一環として行った。活動するにあたっては、学習指導要領の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域の目標が達成できるように工夫を取り入れながら進めた。

児童は、回数を重ねるごとに、記事の内容の中心を捉えながら読むことができるようになり、読んだ内容が伝わるように工夫しながら紹介内容を書くことができていた。また、伝えたいことを、筋道を立てながら話をしたり、聞き手も話の中心に気を付けながら聞き、話し手に質問や感想を述べたりすることができるようになった。

児童は、新聞記事を読み、「淡河の道の駅にもこんな店ができたら嬉しいなあ。」と新たな世界を発見して夢を膨らませたり、「私もこれからこんな風にしていきたい。」等と、知識の習得だけでなく、今後の生活を見直す機会や考え方が変化したりと、新聞紹介がきっかけとなり、多面的な力を身に付けることができた。

新聞記事をもとに、紹介文を考える児童。分からない言葉や漢字は辞書で調べながら行った。



新聞を紹介する児童。みんなが楽しく真剣に取り組むことができていた。



新聞記事と紹介文の教室掲示の様子。



(7) 新聞記事作成の学習 (4・5・6年生)

神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師に招き、新聞記事が出来上がるまでに携わっている人が行う仕事内容や作成するときのポイント、記事の仕組み等について教わった。

【4年生】

教わった知識をもとに、総合的な学習の時間に調べた福祉に関する内容を新聞としてまとめ、クラスで発表した。

見出しやリード文、本文の内容などをしっかり意識しながら、伝えたい内容を聞き手に分かりやすくまとめることができるようになった。

【5・6年生】

初めてまわしよみ新聞を体験した。まず始めにグループに分かれ、それぞれの児童が興味のある新聞記事を見つけていった。次に、その記事をグループの壁新聞に掲載するかを検討するため、自分の選んだ記事の魅力を伝え合った。話し合いをする中で、グループのメンバーみんな

なが納得のいく記事を選び、グループによりテーマが違う個性に溢れる壁新聞を完成させることができていた。記事のレイアウトや、記事についての感想や説明も児童同士で話し合いながら楽しく仕上げていた。自分の思いを伝え合いながら充実した言語活動も行うことができた時間となった。

最後は、各グループの壁新聞を紹介し合い、聞いた感想を発表し合った。

話し合いながら記事を作成中の児童。



壁新聞を紹介中。



(8) 体育での新聞活動 (5・6年生)

体育の「表現運動」で新聞を使った活動を行った。2人1組になり、新聞を持つ児童と持たない児童に分かれる。新聞を持つ児童は、その新聞が自分のペアの友達だと想定し、変身してほしい姿に形を変化させる。新聞を持たない児童は、新聞に変身したつもりで、ペアの友達が動かす新聞の形の通りに体を表現していく。新聞を折ったり、ねじったり、ひらひらと動かしたり、新聞紙でできる様々な形や表現の仕方を楽しみながら行った。

新聞をリレーのバトン替わりにして、新聞紙が落ちないようにしながら走る活動も楽しみながら行うことができた。

新聞の形に合わせて体を折り曲げる児童。みんな楽しく笑顔で活動。





新聞リレーを楽しむ児童。お腹に新聞紙をあて、落ちないように走っていく。

(9) 新聞バッグ作り (1・6年生)

地域の講師を招き、新聞を使ったバッグ作りに挑戦した。「読み終わった新聞を廃棄せず、自分の使いたい大きさやデザインに形を変えてバッグにする(アップサイクル)ことで、環境にも優しい。」と教わった。

新聞紙を重ねたり、くるくる巻いたりすることで口の部分や取っ手を丈夫にさせた。入れたい物に合わせて大きさを変えたり、新聞記事を丁寧に観察し、好きな写真や絵が作品の表にくるように工夫をしたりと、新聞の良さを生かしながら完成させた。

講師から「プラスチックを土に戻すには何百年とかかるが、新聞は早く土に戻る。なるべく土に戻すことができる、環境に優しい物を使うようにしていきたい。」と言う話を聞き、SDGsについて考えていくきっかけにもなった。



折り紙を付けたたり、色を塗ったりと、素敵なオリジナルバッグが完成。

(10) 図工での新聞活用 (4年生)

絵を描く際、記事の写真や風景を見ながら、その絵に対するイメージを膨らませたり、彩色の参考にしたりした。



新聞記事の写真も参考にし、絵を描く児童。

(11) 手作り新聞オンライン発表会

(5・6年生)

「NIEで小規模校を繋ぐ研究チーム」を県内の4校の教員で立ち上げた。日頃から多くの児童と関わり合う機会が少ない学校の児童同士と一緒に一つの新聞を作成し、その内容を伝え合った。各校の地元で取材した歴史や自然、町の話について紹介し合ったり、紹介を聞き、疑問に感じたことを質問し合ったりと児童にとって初めての楽しい体験となった。「淡路や氷ノ山に行ってみたくなった。」「また交流したい。」と知識や視野を広げるだけでなく、児童同士のコミュニケーションの楽しさも味わえた貴重な活動となった。



3 成果と課題

校内の研修テーマ「NIEを活用した言語力の育成と言語活動の充実」を目指し、全教員が全学年において、新聞を活用した教育活動を行うことができた。指定校1年目ということで、どのように新聞を活用していったらよいのかを模索しながらの1年であったが、発達段階に応じた様々な活動を実践し、言語活動だけでなく、知識や視野の拡充、コミュニケーション力の育成、他者理解など多岐にわたる力を伸ばすことができたと考えている。

新聞を身近な存在に感じられる児童が増えた事を土台とし、今後は、児童自身が進んで新聞を手に取り、主体的に新聞を活用し、個々の興味に応じた力を伸ばしていくようにしたい。

新聞を通して、社会への関心を高める取り組み

尼崎市立立花南小学校	校 長	永井 君子
	主幹教諭	山川 和宏
	教 諭	近江 佑太
	教 諭	大串 洋介

1 はじめに

本校は、本年度創立 50 周年を迎えた市内中央に位置する中規模校である。昨年度より、コミュニティ・スクールのモデル校となり、地域に開かれた学校として教育活動を行っている。

近年、「阪神・淡路大震災をどのように報道してきたか」をテーマに神戸新聞の記者の方に出前授業をしていただいていたご縁で、本年度より NIE 実践校としての取り組みを始めた。実践の担当教員は、3 人である。

2 具体的な取り組み

(1) 新聞記事の紹介

① 図書室の活用

毎日届けられる購読紙(2紙)を児童が自由に閲覧できるように「新聞閲覧スペース」を設けることにした。当初は、校舎の1階廊下スペースにソファを置いて閲覧場所にすることも検討したが、どの学年の児童も週1回は利用し、休み時間にも開館している図書室内に設ける方がゆっくり閲覧できると判断し、司書の先生の協力を得て、図書室に閲覧スペースを設けた。

最近1週間の新聞は、新規で購入した新聞用ラックに整理し、それよりも古い新聞は段ボールで作成した手作りのラックにストックした。その中から興味を持った記事を切り抜けるように、スクラップブックも用意した。

そして、児童会役員の子を中心に週1回集まって、気になる新聞記事を切り抜いて紹介するポスターを作ったところ、それを見て興味を持った児童が広く参加することにつながった。図書室の壁一面に、気になる図書を紹介するポップと、気になる新聞記事を紹介するポスターが張られ、読書力向上につながる活動になったのではないかと考えている。

② 6年生の活動

6年生には NIE 実践に取り組む担当教員が2名いたこともあり、本校の中で中心的に実践に取り組んだ。

前述の図書室における新聞記事の切り抜き紹介にも積極的に参加し、一部を職員室前の掲示板に張り出したところ、地域の方から「面白い活動をしていますね」とお褒めの声をいただき、地域に NIE の活動をアピールすることにつながった。

また、夏休みの間に学校に配達されていた新聞の中から、テーマを決めて新聞記事を切り出し、模造紙1枚にまとめるグループ活動を行った。東京オリンピックや

高校野球など、子どもたちにとっても興味・関心を持つテーマが多く見付き、非常に熱心に記事を探していた。自分の目的に応じて、たくさんの新聞記事の中から情報を見つけ、それを取捨選択し、さらにその情報を整理するという活動は、子どもたちが目的に応じた情報収集と整理をする技術を身に付けるのに大いに役立った。自分が得た情報の中から自分の考えを持つことができるように、単なる紹介に終わらず、その出来事を通して考えたことを文章にすることも行った。



③5年生の活動

10月24日、神戸新聞から講師となる記者の方を派遣してもらって、神戸新聞写真ニュースなど実際の記事を教材にして、その記事にどんな見出しをつけるかを考える授業を行った。内容を端的に伝えるとともに、読者へのアピールとなる見出しのつけ方について、児童は理解を深めていた。

さらに、教えてもらったことをもとに、タブレットを使って既成の新聞記事に自分なりの見出しをつける活動を行った。



④掲示板の活用

職員室前の掲示板を NIE 実践の紹介スペースとして活用し、年間を通して、子どもたちが作成した新聞記事の紹介や、記者派遣事業における授業の様子、子どもたちが学習のまとめとして作成した学習新聞・壁新聞の紹介などを行った。

(2) ワークシートの活用

NIE ホームページから各新聞社が作成している学習用ワークシートを入手し、お昼の帯タイム（10分間）に取り組んだ。簡単な設問がついているので、大事などころを読み落とさないように記事を読む習慣を身に付けるのに役立った。

(3) 記者派遣事業

①6月25日、毎日新聞阪神支局より講師の先生として記者の方を派遣してもらい、6年生に新聞の構成や紙面の作り方などについて授業を行った。新聞には政治・経済・社会・地方などの紙面があり、新聞は日々出稿される記事や写真を、編集部門で整理して紙面を作っていることを紹介してもらった。また、2005年のJR福知山線脱線事故の紙面を教材にして、見出しを考える活動も行った。

②10月24日、神戸新聞の記者の方による「見出しのつけ方」についての授業（前述）。

③2月28日「有事におけるメディアリテラシー」をテーマ、神戸新聞の記者の方が、ロシアのウクライナ侵攻を題材に、真偽入り交じった情報とどう向き合うかを考える授業を行った。神戸新聞「写真ニュース」の2021年12月号～2022年3月号の中からイチオシ記事を選ぶ活動も行い、大きなニュースを家族や友人で語り合うことの大切さについて学んだ。



(4) デジタル新聞の活用

デジタル朝日新聞を3か月無料で利用できるキャンペーンに応募し、4～6年生は毎朝10分間の読書タイムなどを通して、日常的に新聞記事を読む活動を行った。家で新聞をとっている家庭が少なくなっている中、新聞を読む習慣につながった。また、デジタル朝日新聞で紹介されていた新聞記事を紹介するポスターを6年生がタブレットを使って作成し、掲示板に張り出した。



(5) 新聞紙のその他の活用

①演劇ワークショップ

NIE 担当の教員が演劇の指導者でもある関係で、児童に演劇を教える際に、新聞を使ったワークショップ形式の活動を取り入れた。具体的には、グループで新聞記事の中から一つを選びその記事に書かれている内容を端的に表現する即興劇を披露しあう活動や、新聞紙を2枚用意し、新聞紙の上だけを歩いてゴールまで競走するリレーをする活動などである。

②エコバッグづくり

古い新聞紙を活用したエコバッグ作りにも取り組んだ。古新聞は整理して保存しているが、切り抜きの活動をしたことでどうしても処分しないといけないものが出てくる。そこで、処分するものの中からエコバッグに転用できそうな新聞紙をストックしておいて、エコバッグを作成した。思いのほか丈夫に作れたので、児童も喜んでいた。

3 成果と課題

NIE の実践に取り組むことで、大事なポイントを落とさずに情報を読み取ることができる読解力の向上につながるのではないかという期待を持っていた。実践を始めて1年足らずだが、その成果が目に見えて現れているかという点、必ずしもそうとはいえない。日常的に新聞に触れようとする機運が児童全体に高まっているかという点、確かに増えてはきているものの、まだまだこれからだと感じている。

しかし、特に社会科の授業をしていて感じる点だが、児童の中に今の社会への興味や関心が広がっているように思う。実際、尼崎市が独自に行っている学力テストの意識調査で、社会への興味・関心や、学習したことを新聞にまとめる活動の経験を問う項目が大きく向上していた。これは、新聞を活用してきた効果であると考えられる。

また、日常的にニュースが話題になることも多い。ロシアによるウクライナ侵攻のニュースは、教員よりも先に児童が見つけていたほどだ。本年度から児童1人に1台タブレットが配布されたが、ネット記事に触れる機会が飛躍的に増えている。あふれるネット情報の中で、正しい情報を見抜く力がこれからはますます必要になってくるだろう。

新聞という情報の宝庫に日常的に触れていくことで、正しい情報を手に入れるチカラを児童が身に付けていけるよう、これからも実践を継続したいと考えている。

「読む」「感じる」「伝え合う」

力の育成をめざして

養父市立宿南小学校 校長 増田 真知子
主幹教諭 栄羽 麻里

1. はじめに

本校は、養父市北部に位置する、全校児童 27 人の小規模校である。地域の先人である江戸時代の儒学者「池田草庵」先生の教えをもとに、家庭・地域とのつながりを大切にしながら学校教育を推進している。保護者は教育への関心が高く、新聞を購読している家庭が多い。児童の情報源も、半数は「新聞」である。しかし、家庭で新聞を購読していない児童は、高学年でも世の中の出来事に関心が薄い様子が見られ、日々の学習の中で、社会的事象の理解に時間がかかることがある。また、文章の要点をまとめて発表したり、お互いの考えを伝え合ったりする力も十分ではない。児童には、様々な文章を読んで自分の考えを持ち、さらに伝え合いにより、考えを広げ深めていく力が必要であると感じている。

そこで、子どもたちの「読む」「感じる」「伝え合う」力の育成を目指して、今年度 NIE を推進していくことにした。実践を通して、新聞を「読む」、文章から「感じる」、感じたことを「伝え合う」力を育成していくことを全職員で共通理解した。取組の内容については、学年の実態に応じて工夫していくようにした。

2. 実践の概要

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

配達された新聞を全校生が読めるように、こども新聞は 1～4 年生のスペース（2 階）に、一般紙は 5・6 年生のスペース（3 階）に置いた。

また、毎日全員が通る特別教室前の掲示板に特設コーナーを作り、特に児童に読んでほしい記事を掲示するようにした。保健関係の記事については保健室前に掲示し、健康の促進に役立てた。

(2) 各学年の取組

① 1・2 年生

- 図工「しんぶんしとなかよし」 新聞を自由に使い、好きな世界を作った。
- 国語「カタカナをみつけよう」 新聞記事の中からカタカナをみつけた。



新聞を使って工作を楽しむ子どもたち



集中してカタカナを見つけている子

②3・4年生

○新聞記者派遣事業 令和3年10月15日（金）

兵庫県 NIE 推進協議会より三好正文氏に來校していただき、『新聞づくりについて～見出しをつけよう～』という学習を行った。日頃から新聞に興味を持ち、学習の中でも新聞を活用してきた子どもたちは、この日の授業をとっても楽しみにしていた。短時間ではあったが、新聞についてより関心を高めることができた貴重な時間になった。学んだことは、その後の新聞作りで生かしていった。

児童の感想・・・

金曜日に、新聞の学習をしました。5W1Hは、「いつ・どこで・何を・なぜ・どのように」ということで、それが新聞記事の中に入っていることが分かりました。

また、竹田城の話では「うかぶ」を「ふわり」に言いかえると本当にうかんでいる感じがするので、見出しをつける時はよく考えなければいけないことも分かりました。里山体験や社会見学の新聞を書く時に、今日教えてもらった見出しのつけ方の勉強を生かしたいです。



新聞の構成について学ぶ子どもたち

③5・6年生

○小規模校交流事業 令和3年6月18日（金）

NIE のアドバイザーである三好正文氏の指導のもと、班ごとにこども新聞から選んだおすすめの記事を1枚の新聞にまとめる学習を行った。

取組のポイントは、①関心を持った記事を3枚選ぶこと②一番伝えたいトップの記事が目立つように配置すること③写真の近くに、記事の感想を簡潔に書くこと④空いたスペースには、記事に関する俳句やイラストを描いて楽しい新聞にすることという4点である。どの班も、みんなで話し合い工夫しながら新聞作りを行うことができた。作った新聞をみんなの前で発表し合うことで、それぞれの良さを認め合うこともでき、大変有意義な時間になった。



出来上がった新聞を紹介する児童

○オンラインでの交流会

1回目：令和3年10月20日（木）

今年度NIEの取組を行っている県内の3校（神戸市立淡河小、有馬小、淡路市立大町小）と、オンラインで交流を行った。

1回目は顔合わせということで、各校の紹介と1人1人の自己紹介を行った。初めての取組で、どの学校の児童も少し緊張気味であったが、発表を進めていくうちに、学校によって様々な行事があることやそれぞれの地域の特色を知ることができ、とても楽しい時間を過ごすことができた。



しっかりと発表することができ、自信をつけた子どもたち！

2回目：令和3年12月17日（金）

2回目の交流の前に、4校がそれぞれ地域の歴史や自然、産業などについて調べてまとめる学習を行った。本校では、5年生が「兵庫県で1番の高さを誇る氷ノ山」、6年生が「地域の先人池田草庵先生」の二つの内容を新聞記事としてまとめた。

交流の当日は、各校で作成した記事の内容を、学校ごとに詳しく紹介することをめあてに進めていった。新聞記事だけでは分からないことを、パワーポイントを活用しながら具体的に提示したり、クイズ形式で楽しく紹介したりするなど、工夫を凝らした発表を行うことができた。発表の後には、質問や感想を伝え合うこともできた。

取組を重ねる度に、子どもたちは交流に慣れていき、自分の発表を堂々で行うことができるようになった。また、オンラインで遠く離れた仲間と会話ができることを楽しく感じ、次の交流を期待する声を聞くこともできた。



**発表を聞いた後
質問をする児童**



他校の発表を興味深く聞く5・6年生

児童の感想・・・

神戸や淡路の小学校と、オンラインで交流しました。今回は、それぞれ住んでいる地域の魅力を伝える発表でした。淡河小学校の発表ですごいなと思ったところは、江戸時代から残っている旅館があることです。私も行ってみたいとなりました。大町小学校は、大きな岩について発表しました。ほとんどの人が登ったことがあるみたいで、いいなと思いました。有馬小学校の近くにある有馬川は、とてもすてきでした。春夏秋冬それぞれ楽しみがあることも分かりました。今日の交流で、他校のよさについて知ることができて楽しかったです。

④朝のスピーチ・自主学習での活用

3年生以上の児童は、朝のスピーチで新聞記事を活用している。毎朝、新聞から関心を持った記事を選び、その内容について概要を説明し感想を伝える。聞いている児童は、気になったことをメモし、発表の後に質問をしたり感想を伝えたりする。このやりとりの積み重ねにより、毎日のニュースにあまり関心を持たなかった児童が、社会の様子に少しずつ関心を示すようになった。

さらに興味を持った児童は、自主学習として自分で選んだ記事について感想を書いたり、もう少し詳しく調べて見聞を広げたりしている。

3. 成果と課題

NIEの推進にあたり、児童の新聞への関心度には個人差があるため、どの子にとっても無理のないように実践していくことを心がけた。

まず前年度に、各学年ごとの「NIE教育推進計画表」を作成し、様々な教科や活動を通して、新聞に「ふれる」ことを大切にしたい。そして、児童の実態に合わせて、徐々に新聞を「読む」、文章から「感じる」、感じたことを「伝え合う」力の育成をめざしていくようにした。

その結果、どの子も新聞に慣れ親しみ、社会の動きや情勢に目を向けるようになった。また、「新聞記者派遣事業」や「オンラインでの4校交流会」から、新聞についての基礎的な知識を身に付けたり、新聞作りを通して自分たちの住む地域のよさに気づくとともに、他の学校や地域の様子を知ったりする機会を得ることができた。新聞記事を通じてのつながりが人とのつながりを生み、子どもたちの見聞を広げ、伝え合う楽しさを味わうことができた1年であった。

今後は、本年度の取組を土台に、まず「NIE教育推進計画表」を見直し、より具体的な取り組みをイメージした計画表にしていく予定である。そして、NIE教育を校内研修の一つとして推進し、新聞から学び、新聞を通して自分の思いを表現したり、進んで対話していく子どもの育成をめざしたいと考えている。授業でも、各新聞社のワークシートを積極的に活用しながら読解力を伸ばし、学習したことについて、構成をよく考え表現を工夫しながら新聞にまとめるなど、さらにねらいを絞った取組を進めていきたい。

NIEの実践が、子どもたちにとって「新しいことを知る」、また「いろいろな人や場所とつながる」良い機会になり、「伝え合う」発信の場として意欲的に取り組めるものとなるよう、さらに研修を積み上げていきたいと考える。

【 中 学 校 】

NIE ノートを通して、見える世界と関わる自分

～SDGs 教育プログラムの実践、万博 EXPO2025を見据えて～

西宮市立浜脇中学校 校長 辻村 隆

教諭 渋谷 仁崇

○実践の概要と内容

1. 「NIE ノート」

2021年度から全校生徒、約850名1人1人が「NIEノート(記事スクラップ)」を作成している。

その中で社会全体や、世界の動きを通し、社会科への関心、興味を高め、世界や日本社会全体の動きを考えるねらいがある。また、生徒たちの「主体的な学び」の実践としても行っている。

授業の最初に、各班の代表が、書画カメラや、個人パソコンを活用して発表をする。お互いに発表者の内容をメモにとったり、意見を交流したりすることで「対話的な」学習に結びつけている。

毎回、それぞれ個性的な記事や、大きな社会的動きの記事などを発表している。社会の動きなど、興味関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分の意見やアイデアを発揮できる人になってほしい。



ノートにスクラップした新型コロナの記事を紹介する生徒
（10月4日、兵庫県西宮市立浜脇中学校で）

【読売新聞 朝刊掲載】

発表を聞いているときはNIEノートに各自記事内容をメモします。

●生徒配布用プリント

★NIE (Newspaper in Education)

【毎授業 最初5分程度】

最近の新聞から、記事を切り取り、ノートに貼り、自分なりにまとめたものを発表。

→定期テストに時事問題として出題。

新聞をとっていない人は、テレビのニュースを聞いたり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

★NIE ノート

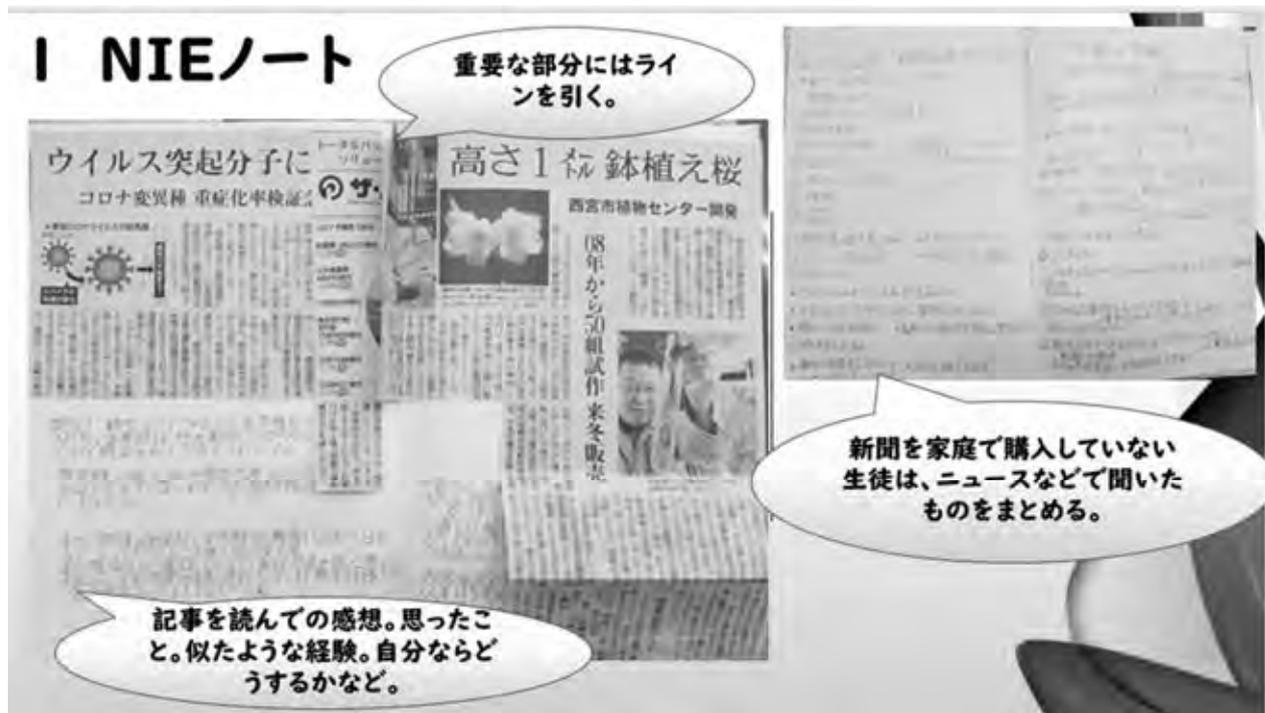
- 確認 1. どれぐらいの頻度で記事をまとめているか。週に1回が基準。
2. 新聞をきれいに切り取り、貼る。
3. 「日付」、記事の「まとめ」、自分の「感想」をしっかりと書いているか。

○「NIE 発表について」

●『思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』

●『主体的に学びに向かう姿勢を育む』

- ・正しい日本語を読む力。
- ・見出しの付け方。
- ・記事の内容を理解し（記事の起承転結）、まとめる力。
- ・自分の感想を表現する力。
- ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。



★全校生を通じて、コロナ禍の関連記事が多い。

「自分たちだけではなく、家族のためにも感染予防対策をしたい」

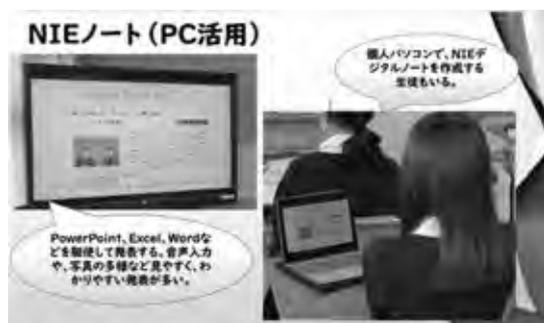
- 1年生 コロナ禍の対策
- 2年生

社会科で大阪万博 EXPO2025 と連携中の「SDGs (持続可能な開発目標)」関連が多い。「COP に参加する、岸首相が大きな目標を立てるだけでは意味がなく、私たち一人一人が意識を高めて実際に行動していくことが大事」と発表。

- 3年生

学習した「衆議院選挙」について、「地域の神社に吹奏楽の石碑が建てられた」「『カブトムシが夜行性ではなかった』という小学生の研究がアメリカの学会で発表された」など、自らの実生活や関心事についての発表も多く、多様性が感じられます。

・特別支援学級「猫の多头飼育問題」や「沖縄本土復帰 49 年続く基地負担」など、自分の興味のあるものを中心に調べています。



2021 年度より、PCでの発表をする生徒が増えてきた。『発表します』（アプリ活用）



2 トライやる事業 (NIE推進協議会との連携)

○中学校2年生を対象[11/25 木]

255名の生徒が、特色ある12講座に分かれた。

NIE推進協議会 三好氏に講師としてきていただきました。
「新聞記事の作り方」「取材の仕方」を学びました。
実際に、他講座を「生徒が取材」「写真撮影」「インタビュー」し、記事にしました。

講座名	講師名	受け入れ事業所
① YouTuber		FunMake
② ヨガ		フィットネススタジオGino
③ 公務員への道		興国高校出前授業①
④ 目指せなにわの職人		興国高校出前授業②
⑤ ゲームプログラミング入門		興国高校出前授業③
⑥ 高校生のラグビー入門		興国高校出前授業④
⑦ NIE		神戸新聞(渋谷先生)
⑧ 読解・漢字		[渋谷先生]
⑨ 漢字検定		[渋谷先生]
⑩ 美術		武庫川女子大
⑪ 音楽(木管楽器)		北摂ブラス・パーカッション連盟
⑫ 神輿の仕事		西宮神社



新聞講座に参加した生徒が、記事作成(構成・取材・写真撮影・校閲)などすべて行いました。

3 NIE アンケート



4 ウクライナ問題を考える。

浜脇中学校 西村 哲

授業の冒頭で、一日一人ずつ新聞記事を紹介する取り組みをしている。今年2月になり、何人もの生徒がウクライナ問題のことを取り上げ始めた。発表を聞いている生徒の中には、「何が起きているの？」「どういうことなの？」との疑問の声もあった。2月24日、ロシアがウクライナに侵攻した。これは大変なことになる。自分には何ができる？迷ったあげく、同僚に「授業でウクライナを取り上げませんか」と相談した。教科書の学びにとどめず、現実に行っている世界的な大事件に、日常の学びを結びつけられるかもしれない。単に「戦争反対」や「かわいそう」ととどまらず、学んだ知識や調べた情報をもとに、自分の頭で、この大事件を考えさせたい。そんな思いのもと、授業を企画した。

生徒たちはまず、ウクライナ・ロシアの地理・歴史を調べてまとめた。小麦の産地や地下資源のパイプライン、ロシアの国の広がり歴史、日露戦争、ロシア革命、ソ連崩壊のページを丹念に読み込んだりしていった。クリミアを調べた生徒のなかには、2014年のクリミア問題のみならず、19世紀のクリミア戦争を調べる生徒がいた。また20世紀のアフガニスタン侵攻、2021年のアフガニスタン問題を検証した生徒がいた。大人は、どうしてもNATOやソ連といった冷戦構造に縛られて考えてしまうが、生徒たちにそんな縛りは存在しない。生徒たちは、大人が想像するより、もっと柔軟で、もっと思慮深く、もっと多面的に分析を進めていった。

生徒たちは、これから先に心配されるシナリオを予想した。また今回の当事者である「ウクライナから避難している人々」「ロシアの中で戦争に反対している人」「ウクライナの中学生」宛てに手紙を書いた。中にはウクライナ語、ロシア語で表現しようとする生徒もいた。授業する教師にさえも解決方法が分からない大事件である。生徒も教師も自分の頭で考え続けるしかない。「考え続けること」こそが本当の意味での社会科授業なのかもしれない。

(22.3.26 神戸新聞)



未来を切り拓き、生き抜く資質・能力の育成

兵庫教育大学附属中学校 校長 上野 佳哉
職名 橋本 美砂子

1. はじめに

本校は、総合的な学習の時間を主軸として、教科等横断的な学びと STEAM 教育の実践を図っている。学校教育目標の中には、“目指す生徒像”として、「物事を多角的に理解し、新たな価値を『共創』できる生徒」という目標を掲げている。また“目指す大人像”は、「ミライを語る本物の大人」として、教員の目標も掲げられている。これらの目標からも分かるように、学校全体として、大人も子どもも共に学ぶ姿勢を意識しながら、日々の教育活動が展開されている。

昨年度の NIE の取組としては、新聞フォーラムや、防災に関するパネルディスカッションを行った。コロナ禍ということもあり、各教科では新聞を用いた授業を展開できた部分もあったが、全体としては連続した授業構想を練ることが難しい面があり、単発の授業にならざるをえない部分があった。そこで今年度は、実践校 2 年目として、NIE の活動と本校の軸である総合的な学習の時間の授業とをリンクさせ、連続的な深い学びへとつなげていくことを念頭に置いて取り組むことにした。

今年度の研究テーマは、「未来を切り拓き、生き抜く資質・能力の育成」である。この実践報告書では、キャリア探究総合の授業を通して、生徒がどのように学びを深めていったのかを紹介したい。

2. 実践内容

【NIE コーナーの設置】

昨年度に引き続き、新聞は全校生徒がいつでも読めるように、全校生徒が通る渡り廊下

の一角に閲覧コーナーを設置することにした。新聞コーナーの隣には、新聞記事に関する本や、各教科の授業内容に関する本が置かれている。小さなことかもしれないが、NIE と各教科とをつなげる工夫をしている。



(渡り廊下に設置された新聞コーナー)

【記者派遣事業：NIE 座談会】

11月19日(金)、記者派遣事業として、産経新聞の小林記者を本校へお招きした。

5 時間目の講演会では、小林記者より「新聞記者の視点から語る"ミライ"に必要な力」というテーマでご講演いただいた。その後、6 時間目には、小林記者、各学年の代表者、本校教員の三者による NIE 座談会を開催した。多面的・多角的な思考を促すため、三者での座談会とした。また、その他の生徒は各教室から Zoom での参加となったため、座談会の途中で各教室へ質問を投げかけ、チャット機能を用いて返答してもらおう等、双方向のコミュニケーションがとれるように心掛けた。

座談会では、生徒から小林記者に対して「どのように取材するのか？」という質問をきっか

けに様々な質問が挙げられた。一方、小林記者からも「興味がわく新聞とは？」という質問が投げかけられ、返答の中には「ににおいがする新聞」というユニークな意見も見られた。

座談会の話題は多岐にわたり、最後には小林記者から「勉強の大切さ」等、キャリア教育につながる話を聞くことができた。教員とは異なる別視点の大人の話から、生徒たちは、「今、自分たちが勉強していることは無駄ではない。大人になって何かに結びつくかもしれないから頑張ろう」という前向きな考えに至っていた。新聞を身近に感じる、という点で、12月から始まるキャリア探究総合へつなげることができた。



(教員、小林記者、生徒の三者による座談会)



(報道部員による Zoom 配信)

【キャリア探究総合】

12月からキャリア探究総合が始まった。全体としては10以上の講座がある中で、NIE(国語)の講座は、情報分析力を高めたい生徒や、文章力を高めたい生徒(1年生、2年生の希望者14

人)が選択受講することとなった。

今回の講座は、神戸新聞の三好正文さんを講師としてお迎えし、15回にわたる授業を展開していった。生徒たちは、前半に新聞の書かれ方やインタビューの仕方を学んだ。その後、後半は表現活動(探究活動)となる。SDGsをテーマとして、各々が選んだ新聞記事から、各自が捉えた課題を探究し、最終的に自分の考えを「ことまど新聞」へまとめていった。

【キャリア総合選択授業 学習計画】

教科	NIE(国語)	
主題	ニュースです!編集長~記者から学ぶ「情報活用能力」の鍛え方~	
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○本講座を通じて情報の収集、活用スキルを身につける。 ○新聞記事の企画、執筆、編集を通じて、真実の探究する楽しさを感じ得する。 	
回数	日付	内容
1	12/9(木)	全体オリエンテーション
2	12/16(木)	「情報収集スキル」講座
3	12/21(火)	新聞の書かれ方まとめ
4	1/13(木)	発表、振り返り
5	1/20(木)	新聞5紙の読み比べ
6	1/25(火)	発表、振り返り
7	1/27(木)	「SDGs」講座
8	2/1(火)	企画書作成①記事選び
9	2/3(木)	企画書作成②課題発見
10	2/10(木)	企画書作成③課題考察
11	2/17(木)	「ことまど新聞」の使い方、インタビュー体験 (神戸新聞社・武藤邦生さん)
12	2/22(火)	「ことまど新聞」作成①
13	2/24(木)	「ことまど新聞」作成②
14	3/3(木)	「ことまど新聞」作成③
15	3/10(木)	発表、振り返り

【生徒が作成した新聞の比較スライド】

どうい新聞が読みやすく分かりやすい新聞なのかを徹底比較！

阪神淡路大震災：共通点と相違点 2022.1.18		
神戸新聞 (27年 最新伝える 学ぶ) 見出しあり 画像(カラー) (一箇所) 表紙	朝日新聞 (読む 報道と記憶) 見出しあり 非常用食料の活用について 表紙	日本経済新聞 (読者対象 品書き どう書く) 見出しなし 画像(モノクロ) (少) 表紙X
毎日新聞 (にきん心に読む / 死と再生のいのちを思う) 見出しなし / (少) 画像(1枚カラー) (多) 表紙	読売新聞 (新し続ける この場所) 見出し(少) 図表あり(健康状況・ 兵庫県東市定地の被災状況) 画像(モノクロ) (多) 表紙	共通点 写真 / さうさく 内容 / 1.17の避難や当時の経緯が タイトル / 表紙につなげる無い等

(阪神・淡路大震災の記事を比較している)



【生徒が作成した企画書】

My新聞 企画書

(2)年(3)組(30)番 名氏(姓 姓 姓)

①選んだ新聞記事
 2022年(1)月(31)日(火)朝日(朝日中高生)新聞
 タイトル:「日本から学ぶミャンマーの平和」

②新聞記事の内容まとめ/SDGsの何番目にあたるかを確認
 【記事の内容:5W1H】
 東南アジアのミャンマーで軍事クーデターを起して、2021年2月1日から発生して今年で一年。軍事は、クーデターに反対する市民に対する弾圧を続け、多くの犠牲者が出ている。
 そこで、日本で暮らすミャンマーの人たち取材をして、ミャンマーの人たちの思いが書いてある。

【SDGsの何番目】
 4:質の高い教育をみんなに
 10:人や国の不平等をなくそう
 16:公平な正義をすべての人に

③その記事に対して、自分が考える問題点・課題点を書き出す
 【問題点・課題】

問題点

- ・クーデターが起こる
- ・ミャンマーに帰りたいが帰れない(クーデターが原因)
- ・平和な生活が送れない
- ・自由に生きれない

課題

- ・子供が教育を受けられない
- ・たくさんの方がなくなってしまう
- ・自由がない

①選んだ新聞記事、②新聞記事の内容まとめ/SDGsの何番目にあたるか、③記事に対し

て、自分が考える問題点・課題点、④課題に対する自分の考え を記入する。

【武藤さんよりアドバイス (一部)】



- ・人の名前、日付は確実に！
- ・見出し、本文 どちらから書いても OK
- ・印象的な言葉があれば、いきなり「」から書いても OK
- ・できれば2か所は「」を入れよう。
→せっかくインタビューしたなら、その人が話しているように書こう。単語はダメ。
- ・新聞は日記ではない。
知らない人や、初めて読む人が読んでも分かるように書こう。
- ・(「ことまど新聞」の場合は) 全角で書く。
算用数字(1 2 3...)を使う。

【三好よりアドバイス (一部)】



- ・インパクトのある見出しが必要！
- ・言ったことをそこまで広げすぎない。
できるだけ絞り込みも必要。
- ・自分事、自分たちの問題として考えて書く。

※「自分が世の中をよくしたい」という
気持ちが伝わるように書く！

→調べたこと、コラムがあってもよい。

- ・ただ関係しているだけではなく、どう関係しているかを書く。

【生徒が作成した「ことまど新聞」(一部)】



(自分の新聞を見せながら考えを発表)

【生徒の振り返りより】

①自分の成長した点、課題点

- ・新聞のどこに注目をして読んだらいいか等の新聞の見方や文章力が身についた。

- ・客観的に相手へ伝わる文にできた。
- ・レイアウトや人の胸に刺さる言葉を考える力がまだないと思う。

②他者から気づいた自分の良さ、課題

- ・色々な情報から物事へ結びつける力。
- ・読みの視点が良いことが自分の良さ。
- ・具体的な内容を書くことができていた。
- ・表現をもう少し豊かにした方が良いこと。

③自分にはまだない他者の良さ、魅力

- ・他人にインタビューをして、それに基づいた結果を示している点。
- ・段落を分けて、ゆとりを持って文を書いたり、「、」や「しかし」「だから」を上手に使っていたりした点。
- ・相手に興味を持たせワクワクさせる力。

④今一番、身につけたい力

- ・真面目さと面白さを使い分ける力。
- ・対応力。比較力。
- ・発想力(問題解決をするには発想力が必要)。
- ・世界情勢に目を光らせ、自分事として考え、行動する力。

3. おわりに

これまで一度も新聞を手にとったことのない生徒がいる中で、2年間のNIEの取組は、生徒たちにとって新聞をより身近な存在として感じられる契機となったのではないだろうか。また、社会の中で生きる一人の人間として、社会に対してより真剣に、将来を見据え、どのように生きるかを考える一助となったのではないだろうか。

本校は、令和4年度より国際バカロレア(IB)認定校を目指して、新しい学校創りに挑戦していく。NIE実践校としての取組はこれで一旦終了となるが、2年間に亘るNIEの活動が、きっと今後の教育活動の種となり花開くことを信じている。

新聞を活用した情報リテラシー教育実践

神戸市立神陵台中学校 校長 赤松 三菜子
教諭 山元 公大

1. 概要

本校は、NIE 実践指定以前より、各クラスに新聞を一部配架し、生徒が新聞に親しむ環境構築に努めてきた。今年度の NIE 実践指定を受け、より一層生徒が新聞に親しめる環境づくりを目指すとともに、新聞をきっかけとした情報の取り扱い方・情報リテラシーの向上を目指すこととなった。

現行の学習指導要領においても、情報の項目が追加されており、情報リテラシーの向上が社会からも求められている。今年度はじめに本校生徒を対象に実施した新聞の活用状況アンケートにおいても、多くの生徒が、新聞が持つ情報価値に気づいておらず、インターネットという特定の情報源から情報を得ていることがわかった。本実践においては、生徒が、新聞の持つ情報価値に気づくとともに、新聞以外の情報との向き合い方についても指導していくこととなった。

2. 新聞に親しむ環境づくり



毎日教室に担任が新聞を掲示



防災学習推進週間に
当時の新聞を掲示

これまでも行ってきた各クラスに1部ずつの新聞配架を継続するとともに、今年度は各クラスにおいてより一層「新聞に親しむ環境づくり」に努めた。例えば、担任が毎日気になった記事を教室に掲示し、ST等の時間でその内容について触れることや、社会科の授業において株式について学習した際に新聞に掲載されている株価の面を掲示した。また、防災学習推進期間においては、廊下に阪神・淡路大震災当時の新聞記事を掲示し生徒の震災に対する意識を高められた。

図書館においても、これまでは2社の新聞を1部配架していたが、5社の新聞を毎日配架するコーナーを設けた。図書館内には、学校司書が、生徒が興味のある記事や、図書と関係のある記事を掲示することにより、生徒が新聞に触れる機会を増やしている。また、図書館内だけでなく、廊下や図書館前のスペースにも学校司書が中心となり新聞記事を多く掲示した。



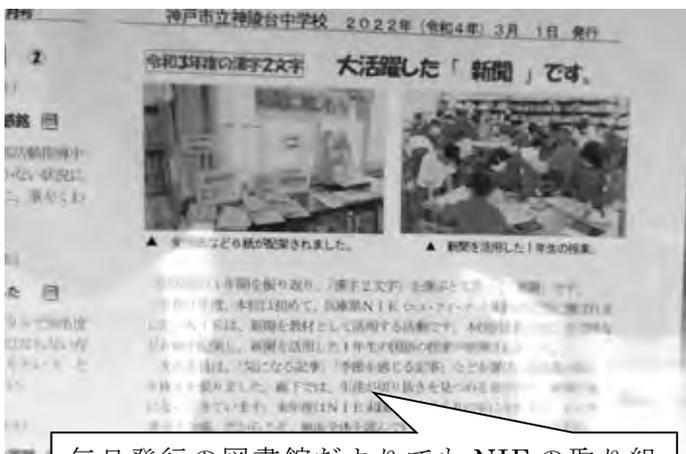
毎日、新聞を教室教卓横に置いておき、生徒が自由に読めるようにしている。また、新聞は教室にストックしていき、いつでも過去の新聞を読めるようにしている。



図書館前の掲示板に、学校司書が選んだ記事や、文化委員の生徒が興味を持った記事を掲示した。



複数の新聞社の新聞を常に生徒が見られるように開架。また、生徒が興味のある記事を学校司書が図書館にて紹介するコーナーも設けた。本・新聞を分け隔てなく開架することで、様々な情報源から生徒が必要な情報を得られるようにした。



毎日発行の図書館だよりでもNIEの取り組みを発信。



図書館に並んでいる図書と関連のある内容の新聞記事を随所に掲示。

3. 授業における新聞の活用

今年度は全学年で新聞を用いた授業を積極的に行った。例えば1年生の国語「情報の比較・分類」の単元においては、生徒一人一人が興味を持った新聞記事を切り抜き、グループで集まった新聞記事を分類・整理する取り組みを行った。



図書館で自分が興味のある新聞記事を探す。



班で集めた記事を分類・整理する。



朝の学習時間に新聞を読む時間を確保。



生徒が気になった記事を背面黒板で共有。

また、朝の学習時間や総合学習の時間において定期的に新聞を読む時間を取り、興味を持った新聞記事を紹介するレポート作成を行った。レポートを教室や廊下に掲示することにより、他者が興味を持った新聞記事についても知ることができ、新聞記事を通じた対話が生まれた。

社会科の授業においては、昨今のニュースについて新聞を提示しながら説明したり、数学科の授業においては毎週新聞内に掲載される数独パズルを紹介、音楽科の授業においては著名な作曲家や音楽について新聞形式にまとめるなど、様々な教科の授業において新聞を活用した実践が行えた。

4. 新聞を発端とした情報リテラシー教育

授業において新聞を用いるだけでなく、総合学習の授業において情報リテラシー教育を行った。具体的には新聞・テレビ・インターネットの長所と短所について考え、それを整理する授業を行った。また、ネットニュースの信ぴょう性を確かめることや、SNSや動画サイトに流れている情報に振り回されないことが必要であることを指導し、日常にあふれる膨大な情報との接し方を学んだ。



メディアの特性に関して考える授業
(生徒の感想)

- ・新聞を読まなくても、テレビでも良いと思っていたけれど、新聞の良さがよく分かった。
- ・新聞を「読む」のは面倒くさそうと思っていたけれど、読んでみて「そうなんだ!」と思えることがあって新聞の良さを知ることができた。

5. 記者派遣事業

1年間の学習の総まとめとして、共同通信社の浜田記者に来校いただき、「情報の正しさ、見極めよう～犯罪に巻き込まれないために～」というテーマで講演をしていただいた。講演ではネット上でフェイクニュースが広まってしまった事例について触れ、新聞記者というメディアの立場から情報との向き合い方について教えていただいた。また、新聞記者という仕事の難しさ、情報の集め方など多くのことを学ぶ機会となった。



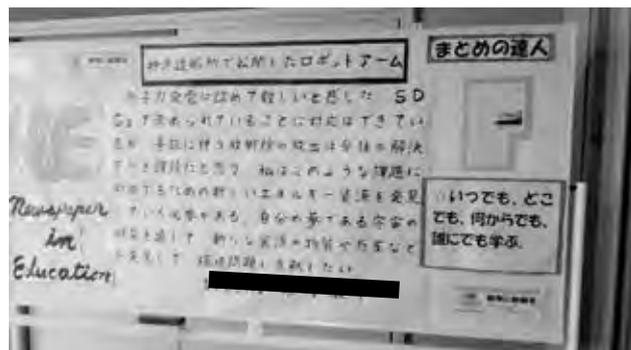
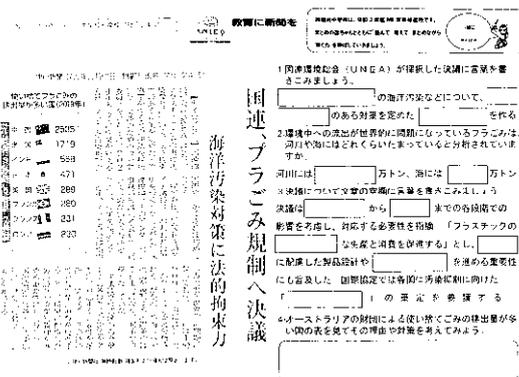
講演の様子

(生徒の感想)

- ・SNS等の情報を信じすぎずにたくさんの情報から、自分なりにまとめていきたい。
- ・いつも読んでいる新聞がどんな風の記事になるのか、どれくらいの時間がかかっているのか、製作の裏側を知ることができて良かった。
- ・情報を発信する際の責任について考えさせられた。

6. 新聞記事をまとめる学習

朝の学習時間において新聞記事の内容をまとめ、文章を書く力をつける「まとめの達人運動」を年間を通じて展開した。優秀な文章については廊下掲示を行った。



新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る

尼崎市立南武庫之荘中学校 校長 屋敷 成治
主幹教諭 中嶋 勝

1. はじめに

新聞を活用した授業を組み立てることは、思考力・判断力・表現力を高め、研究テーマである「言語能力・情報活用能力の育成」につながる。そのことは、本年度末のアンケートに記された生徒たちの感想から実感することができた。

実践計画の概要

1. 国語科を中心にNIE活動に取り組む。
2. 様々な分野の新聞記事を掲示し、世の中の動きに関心を持たせる。
 - ①校内の様々なコーナーに新聞を掲示し、社会の動きに関心を持たせる。
 - ②新聞を使った生徒作品やスクールサポーターが作成したものを廊下に掲示する。
3. コンクール等に応募する。
 - ①日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」
 - ②神戸新聞主催「ひょうご新聞感想コンクール」など
 - ③新聞社への投書
4. 新聞の構成や特徴、新聞記者の思いを学ぶために新聞記者派遣事業を利用する。
5. 国語科の授業実践例
見出し作り・ハガキ新聞作り・新聞紹介・新聞ノート・コラム写し・まわし読み新聞・新聞スクラップ作り・各紙の記事比較・投書欄への投稿
・社説の要約と比較など

2. 今年度の実践内容

本年度は主に「新聞ノート」「新聞紹介」に取り組んだ。また、新聞記者の方に学校に来ていただき、記者として日常考えたり、中学生に伝えたいこととお話いただいたことは生徒たちにとって貴重な体験になった。

(1)「新聞ノート」

授業者が選んだ記事や自分が選んだ記事をノート左側に貼る。右側にはワークシートを貼る。ワークシートには①この記事を選んだ理由②新聞記事の見出し③記事の要約（100字以内）④気づき（新しく発見したこと・驚いたこと・なぜと思ったこと）⑤課題あるいは感想や意見。（200字以内）⑥疑問な点を調べたこと（インターネットや他の記事などで知ったこと）または、今後調べてみたいことを書けるようにした。

始めは1枚のシートを書きあげるのにかなり苦戦していたが、回を重ねるごとに見出しを考え、記事を要約する時間も短くなった。そして、生徒感想にもあるように、記事の要点を読み取る力が着実についてきたようである。

【生徒感想】

- 最初は面倒だと思っていたけど、回を重ねるごとに新聞に書かれていることに共感したり、文章をまとめる力を身につけられたと思う。
- 新聞ノートを続けることで慣れていくうちに段々早く仕上げることができるようになりました。また、その記事を読んで関連することやもっと調べてみたいことがたくさん出てきてまたこれをみんなに伝えたいと思うようになりました
- 新聞ノートを作る中で社会の現象を知れたり、自分の知らなかったことを知ったりと、いろんなことを学べた。そして新聞の中から重要なことだけを抜き出す要約の力が身についた。
- ノートをまとめると文章を書く力が身についたと感じました。記事の中にある情報を

文字数の制限内でまとめたので受験にも役に立つと思いました。

- 一番最後に自分で調べたことを書く欄があるから普段は調べないことも調べることができたので良かった

(2)「新聞記事紹介」

新聞ノートのワークシートに記入したことをもとに班で交流する。記事の紹介と自分の意見を制限時間内(2分)で発表する。自分の考えを分かりやすく相手に伝えるのは大人でも大変難しいことだが、伝え合う練習をすることで、記事に書かれた内容をより深く理解し、考えを明確にして伝える力が生徒に培われるのではないだろうか。

また、班の中から一人を互選しクラス全体にプロジェクターを使って発表することで、聞き手の関心を引き付ける工夫を考えるようにもなった。生徒感想に「達成感があつた」とかかれているように、伝える技術が身につくことでそれが自信につながっていったようである。

学期の後半に、授業の最初に自主的に発表する時間を取ったところ、自主的に発表する生徒も現れた。

【生徒感想】

- その場で文を組み立てる力やコミュニケーション力が上がった気がする。事前にパソコンでみんなが分かりやすいようにロイロノー

トのテキストカードを作ることも工夫したりして楽しかった。

- 何回しても緊張感がすごかった。しかし、クラスみんなが真剣な顔で私のプレゼンを聞いてくれたことがとても嬉しかったので達成感がすごくあつた。

- 友達が紹介している記事は、もっと知りたいとなるし、自分のためにもなるのですごくいい体験だなと思います。

(3)新聞記者派遣

本年度は、神戸新聞社の三好記者に「主権者教育」をテーマに、数年後に選挙権を持つ中学生たちに選挙で投票することの大切さをお話しいただいた。

【生徒感想】

18歳になったら選挙に参加しようという意識が変わりました。楽しく説明してくれて分かりやすかったです。投票することの大切さを身に染みて感じました。

朝日新聞社の西見記者は「SNSといじめ」をテーマに、SNSの正しい使い方や記者としてどのような姿勢で取材をしているかを話された。

【生徒感想】

SNSは便利だけど使い方で相手を傷ついたり自分が傷ついたりするので、相手のことを考えて使えるようにしたいです。優しい人間になって人を助ける人になりたいです。



「新聞ノート」を持ち寄り、グループ討議する生徒たち(尼崎市立南武庫之荘中学校)

興味ある記事を要約、グループ討議

生徒たちは「記事を通し、水質汚染の課題解決など私たちがすべきことを考える」ことができた。(中川 太さん)「グループ討議で、自分とは違う考え方が気づかされた(藤原優花さん)など振り返った。同校国語科の中嶋教諭によると、生徒たちは記事の要約も、回を重ねるたびに進んできたという。「多様なニュースから興味のある記事を選ぶことで意欲的に取り組むようになった」と手感を語る。(神戸新聞N文推進部顧問 石原大知)

「新聞ノート」を持ち寄り、グループ討議する生徒たち(尼崎市立南武庫之荘中学校)が、日刊紙6紙を積み比べ、記事の題名や感想を書き記す新聞ノート」の作成を続けている。教室現場で新聞を活用するNIE活動の一環、話を簡潔にまとめる「要約力」や、自身の意見を端的に伝える「表現力」を養う取り組みといえそうだ。

同校は2021年度の日本新聞協会NIE実践指定校。生徒たちは1学期の国語の授業で、新聞記事を100字以内で要約し、200字以内で感想や意見を記すノートづくりに取り組んできた。

例えば昨年4月、眼疾の池江瑠花選手が白血病から復活し、東京五輪代表入りを果たした記事。生徒たちは「どのような気持ちで白血病と闘ったのだろう」と池江選手

「気候正義」実現への道」という記事を取り上げた生徒は、地球温暖化による海面の上昇で水没の危機にある南太平洋の島国ツバルについて「先進国に生きる一人として、具体的な数値案を考えたい」と強調した。

各グループ代表に発表もあつた。「『気候正義』実現への道」という記事を取り上げた生徒は、地球温暖化による海面の上昇で水没の危機にある南太平洋の島国ツバルについて「先進国に生きる一人として、具体的な数値案を考えたい」と強調した。

ある生徒は「国連気候変動枠組条約第15回締約国会議(COP26)」関連の記事を取り上げた。森林破壊を止めるため、各国が同意合わせて2・25兆円近くを拠出するといった内容に「巨額の資金をどう調達するのか」と首をかしげた。

2021/10/17/10/17

新聞ノートで表現力養う

NEE

尼崎市立南武庫之荘中学校

以下、本年度末の生徒アンケートの抜粋を紹介して報告のまとめとしたい。

I. 「NIEを通じてあなたに身についたことは何ですか」

- やる前よりかなり語彙力がついたことを実感するし、前までほとんど興味がなかった新聞も自主的に少しでも読もうとする時間が増えたと思う。このNIEの活動は勉強受験や社会に出た時に必要になるスキルを養ってくれると信じているのでこれからも取り組んでいきたい。
- NIEの活動を通じて社会の正しい情報を早く知り、自分の意見を持つ力を身につけた。その他にもコラム写しをする事で語彙が深まったし、新聞をもっと読みたいという気持ちになった。新聞を生活に取り入れることで正しい情報を知り、間違った情報に流されない人になりたい。
- 読解力と話す力が私の中で一番身についたと感じる。もともと自分から話すタイプではなかったが、班の子たちと話し合う場面が増えて自分からもどんどん話せるようになっていった。

II. 新聞を読むことに興味を持ってましたか。それはなぜですか。

- 今日本や他の国がどうなっているのかを知ることができて早く情報を得るためには新聞を読むべきだと思ったから
- 学校で新聞をとって家に帰り真っ先にしたことは新聞を読むことでした。ペラペラめくるたびにわくわく感があり好きな記事を見つけると内容を知りたくなったからです。
- 今まではスマホひとつで情報を取り入れていたけど、新聞には地域それぞれの情報などスマホのニュースにはないものもあり興味を持てたから。
- たくさんの文章を簡潔に短く書く練習ができた。新聞を読む機会も増えたので今起きていることが知れた。限られた字数で感想や意見を書かないといけなかったので書く力がついたと思うから。
- 振り返りや感想書くことが苦手でしたが、その新聞についての感想を授業で書くうちにだんだん手がスラスラ書くように動くようになった。また記事を要約することで

朝日新聞社西見記者の記事

NIE
教育に新聞を
2022.1.27
進協議会による記者派遣事業が26日、尼崎市立南武庫之荘中学校であった。朝日新聞の西見誠一・阪神支局長が「SNSといじめ」をテーマにリモートで講演し、2年生が教室で講義を受けた。

生徒らはまず、紙面の割り付けや見出しの役割について学び、その後、ネットいじめの特徴やいじめの構造を新聞記事を参考にしながら考えた。

講義を受けた上田結愛さん(14)は「SNSへの投稿は『ほんまにこの内容で大丈夫か』と考えてからにし

記事見て考える
SNSといじめ
尼崎・南武庫之荘中
県NIE推進協議会
記者派遣事業
26日、尼崎市立南武庫

神戸新聞社三好記者による講演



たい」。坂元小柚さん(14)は「いじめは、ささいなことから始まる場合があることを知った。SNSの発信には責任が伴うことを自覚したい」と語った。

れが大切な情報でどれが省いてもいい情報かを区別する力が身についたから。

■世の中で起こっていることに興味を持ち始めテレビのニュース番組を積極的に見るようになった。そして家でも家族と一緒に新聞を読んで意見を言い合うということもしてみた。それをすることで自分の考えを主張することにも繋がるし、話す力などもつくので良い機会になったと思うから。これからはもっと新聞以外にもネットなどを使ってニュースを知っていききたい

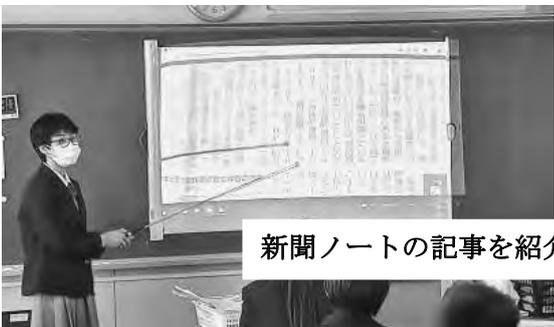
■新聞から得た情報をもとに自分の意見を述べながら他の人の意見も交えて交流している力が身についた。また普段読まない新聞に触れ、記事を選んでいくことはとても面白かったし新聞に興味を持つきっかけにもなったから。

III. 新聞を使ってやってみよう

来年度のNIE活動の参考とするために生徒たちに要望を書いてもらった。どれだけその希望に添えるか分からないが、貴重なアドバイスを今後の授業に活かしたい。

- ・自分の好きな事や好きなものを特集にして新聞を作る。
- ・新聞を読んで調べたことをクイズにする。
- ・同じ内容の新聞を読み比べ、新聞社によって同じ出来事のどの部分を大切に見出しにしているかなど。

- ・人の生き方についてもっと知りたい。
- ・地域の出来事などを調べ実際に地域にインタビューして新聞を書きたい。
- ・家族に新聞の内容を伝えたい。
- ・新聞記事の見出しだけを見て記事の内容を予想してみたい。
- ・選んだ記事を分類分けしてそれぞれのグループを作ってその記事の内容についてグループのメンバーで一つの意見にまとめて発表し合いたい。
- ・地域の方に自分の関心のある記事を紹介する。
- ・国語だけでなく新聞の内容を英語にして、英語の授業でも使ってみよう。
- ・新聞を読んで親とニュースの話をしたい。新聞を他の人の家に配りたい。
- ・何時でも利用可能な新聞記者への質問箱。
- ・講演会は話を聞くだけでなく参加型のものにしてほしい。
- ・新聞社に行ってみよう
- ・朝学習の時間に新聞を読む時間を作る。
- ・物事の流れを新聞の記事を切り取り、まとめる。例えばロシアとウクライナ戦争。その原因と理由、現在の状態、結果など。
- ・ロイロノートで、見出しを隠して見出し選手権をしてみよう。



新聞ノートの記事を紹介



本校玄関に掲示されている新聞各社の1面記事



本校スクールサポーターが作成してくださる新聞掲示物

NIE活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成

加古川市立志方中学校 校長 小原 孝彦
教諭 小山 真輔

1. はじめに

本校は、今年度はじめて NIE 実践指定校となった。本校は加古川市北部に位置する全校生徒 184 名の学校である。小規模校ではあるが、生徒同士の仲はよく、生徒と教師の距離も近く、生徒の様子が比較的観察しやすいといえる。また、「人の心がわかるあたたかみのある人づくり」を学校教育目標として、人権を尊重する教育にも力を入れている。

NIE の実践を行うにあたり、生徒の新聞にふれる機会がどのくらいあるか事前の調査をおこなった。調査結果から新聞(誌面)をとっていない家庭が全校生の約半数ほどあり、そのような生徒の中には新聞に触れる機会がほとんどない生徒もいることがわかった。

そこで、まずは新聞に興味・関心を持たせることが必要であると考えた。そこから、今年度の実践のテーマを「NIE 活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成」とした。

そのテーマの下に、社会的事象や時事問題を授業中に扱うことで、様々な視点から物事を考え、考察し、多角的な視野を持って、正しい判断のできる生徒の育成を目指していく。そして、ゆくゆくは興味や関心をもった社会的事象や時事問題について、主体的に調べ、自ら学習を深められる生徒の育成を目指していきたいと思っている。

まず、今年度は新聞閲覧コーナーを設置

して、生徒が新聞をより身近に感じられるようにした。また、社会科や道徳や総合的な学習の時間の授業では、新聞記事や各新聞社が作成した NIE ワークシートを活用して興味・関心を持てるように促すことから活動を始めた。

2. 実践報告

さて、今年度の NIE 活動・実践の報告として、次の 6 つの取り組みを紹介する。

①新聞閲覧コーナーの設置

新聞に興味関心を持たせるために、新聞が日常的にある環境をつくるために、渡り廊下付近の比較的生徒が利用する場所に「NIE 新聞閲覧コーナー」を設けた。新聞 6 誌を前日の夕刊、当日の朝刊(土日分は月曜日にまとめて提示)を配置することにした。

普段、家庭で新聞にふれることが少ない生徒もこのコーナーで新聞に触れ、興味のある記事を読む機会を与えることができたように思う。また、以前から各教室に毎日新聞が配布されてはいたが、それらの新聞以外の誌面に触れる機会がなく、違った視点から書かれた記事に興味を持つ生徒もいた。生徒の中には、興味や関心のあった記事について、友達同士でコーナーを囲み、会話をしている姿も見られた。時折、その中に教師が加わり、話をする機会が増えた。生徒理解を深める良い機会となったように感じられる。

②授業や総合的な学習の時間における新聞ワークシート・新聞記事の利用

社会科の授業をはじめとし、単元に関する新聞記事や新聞ワークシートを利用して各単元への導入などを行った。また、総合的な学習の時間では、平和学習において戦争体験者の体験談や平和式典などの記事をあつかった新聞ワークシートを利用した。そこに書かれたことを読み取ったり、記事を読んだ感想を書いたりすることで、戦争や平和に関する知識や平和を願う思いを強くすることにつながったように思われる。3年生では新聞ワークシートから得た知識や平和への思いを基にして、学年としての平和宣言を完成させることができた。

今後は、新聞記事や新聞ワークシートを効果的に利用した授業ができるように検討していきたい。

③兵庫県 NIE 推進協議会の石原文知コーディネーターによるワークショップ研修

7月2日に、2年生58人を対象にして、兵庫県 NIE 推進協議会の石原文知コーディネーターに、記事を題材に人種差別問題を考える授業をしていただいた。同協議会コ



石原文知コーディネーターによる授業の様子
コーディネーターによる NIE ワークショップであったので、教職員の NIE 研修と位置づけ、NIE に関する知識や実践方法の習得や技能向上を目的とした。学年をこえた教師が授業を参観した。

また、生徒はこのワークショップで「なぜ、SNS に差別的投稿が届くのか」、そして「自分にできることは何か」を考えた。生徒の感想から、身近な SNS 上でも偏見や差別的な投稿があることに気づき、それに対する自ら取り組めることを真剣に考え、SNS の使い方などについて考えるきっかけとなったことがわかる。人権課題が身近な問題であることに気づき、人権について考えるよい機会にもなった。

◎生徒の感想

「日本でも人種差別があるのだと思いました。SNS をこのように使うのではなく、「こんなことはダメだよ」などというように使用した方がいいと思いました。新聞も SNS も人の思考を変える力があると思うので、良い使用方法をみんながしていけば、差別のない社会、地球になると思いました。」

「常に相手の気持ちを考えて、行動すれば、こんな事は起きないと思います。僕たちも人種に対する正しい知識を持って正しい事を伝えていきたいです。」

「新聞では、色々なことが分かって、その中には、私たちも一緒に考えていかなければならない問題もあるのだと知りました。見るだけでなく、その問題について、自分にできることを考え、行動にうつさなければならぬのだと思いました。」



自分にできる取り組みを考える様子

「今まで SNS でよくない言葉を使って、相手を傷つけるコメントを何回か見たことがあります。でもその時は何もできずに見ていないふりをしてしまいました。その授業をして嫌な思いをしている人がいるから、これからは通報してメッセージを消したり、できることをしたいと思いました。」

④新聞読書感想文

3年生 66名を対象として、新聞読書感想文に取り組んだ。今年度は新聞をとっていない家庭もあるので、夏休みの自由課題とした。夏休み中に新聞を読む機会が増えたという生徒もいた。全員の参加とはならなかったが、新聞に興味関心を持たせる機会となったと思われる。来年度は学年全員が参加できるように課題の取り組みの方法を検討していかなければならない。

⑤記者派遣事業

12月7日に3年生 66名を対象として、読売新聞社姫路支局渡部支局長に来校していただき、新聞記事には大事な内容が最初に書かれており、その後により細かい内容が続いていること、文章を要約したものが見出しでありその重要性について講演していただいた。また、入試の面接に備え、日々のニュースに関心をもつことが大切だと生徒に伝えていただいた。

◎生徒の感想

「記事を読むときには見出しをよく見ながら読むようにしたいと思いました。これからの受験では今回教えてもらった起承転結を意識して小論文を書きたいです。」

「新聞にはより詳しい情報が書かれていることを改めて知ることができたので、新聞に興味を持つきっかけとなりました。」

「新聞の書き方は普通の作文と少し違って逆三角形の構造になっていて、最後を削



記者派遣事業で記事の見出しを考える様子
「でも内容が通じるようになっていることを知りました。」

⑥社会科研究授業における NIE

3月9日に、3年生を対象にして新聞を活用した研究授業を行った。本授業は、加古川市の社会科部会の研究授業でもあったので、地域教材を活用した協同的探究学習の中に NIE 活動を組み込む形式をとった。単元名を「SDGs について考える」とした公民的分野での授業で、地域教材として「豊岡カバン」を取り上げた。神戸新聞で紹介された豊岡カバンの SDGs の取り組みの一例の「漁網バッグ」や「ワインの搾りかすから皮を染めて作ったバッグ」の記事を用いた(神戸新聞 2021年 12月 3日 金曜日 面名 但馬 13 17 ページ)。また、同社が作成した新聞ワークシートも活用し、身近な兵庫県下の企業にも SDGs に取り組んでいる所があること、また豊岡カバンの取り組みを基にして、「企業などがなぜ SDGs に取り組んでいるのか」について協同的探究学習を行い、SDGs に対する理解を深めることができた。

研究授業までに SDGs 関連する新聞記事を探し(紙面もしくは Web 版より)、その記事の要約とそれに対する自分の意見を 200 字程度でまとめさせた。記事の要約に手間取る姿も少し見られたが、記者派遣事業での「見出しの重要性」で学んだことを活か

して取り組むことができた。



社会科研究授業にてNIEワークシートの活用

3. 終わりに—来年度への課題として—

今年度は、NIE 実践校に指定された初めての年度であったため、十分な活動ができたとはいえない。まず、教職員も生徒もNIE活動に対する知識や理解の不十分さがある。

ること。利用すると思われる場所を一か所のみを設置したが、学年によっては利用しづらかった。そこで来年度は、各学年に新聞閲覧コーナーを設け、2紙ずつ配置するなどの工夫をしていきたい。それにより各学年が新聞にふれる機会を増やしていきたい。

さらには、NIEノートなど、生徒自らが興味のある新聞記事をまとめる方法を考え、自ら主体的に社会的事象に興味関心を持てるようにしていきたい。



SDGsについて調べたワークシートと生徒が行った新聞記事の要約など

これを解消するため、NIE についての教員研修を充実させること、各教科で新聞を取り入れた活動を行える環境整備が必要である。

つぎに新聞閲覧コーナーについて検討す

【 中 学 校 ・ 高 等 学 校 】

小中一貫校での交流授業における新聞を 活用した学びあいと2年間のNIEのまとめ

愛徳学園中・高等学校 校長 宮内 健一
教諭 米田 俊彦

1 今年度の取り組み

2020年度から指定をいただいているNIE実践校2年目に当たり以下のことに取り組んだ。

- ・6月の兵庫県NIE推進協議会主催によるオンラインでのNIEセミナーの開催
同セミナーでの時事通信社 丸山実子神戸総局長の講演会への生徒の参加
(詳細は兵庫NIEニュース第66・67号)
 - ・8月のNIE全国大会(北海道 リモート開催)への参加、
 - ・11月兵庫県NIE推進協議会 石原丈二コーディネーターによる人権問題の授業
(詳細は同ニュース第66・67号)
 - ・1月に県推進協の記者派遣で毎日新聞社神戸支局の中田敦子記者による高校生への講演会
 - ・神戸新聞社主催「ひょうご新聞感想文コンクール」への参加・入賞
 - ・日本新聞協会主催「いっしょに読もう!新聞コンクール」への参加・入賞
- さらに、今年度からたな取り組み(詳細は以下の2,3で示す)
- ・5月の「NIE研究会」の発足と小学校と中学校高校が新聞を通して学びあう授業の実践
 - ・国語表現の振り返りを比較し、新聞を読むことの生徒の意識の変化についてのまとめ



NIEセミナーの様子



丸山実子神戸総局長の講演会



神戸新聞6月18日朝刊



2 小学校と中学校高校が新聞を通して学びあう授業の実践について

本学園の小学校と中高が連携して学びあう授業を考えるにあたり、学園の中に「愛徳学園 NIE 研究会」を立ち上げ（前ページに記事）、本学園の小学校の教員と中学校・高等学校の教員が NIE について、ともに考える場を持った。小学校、中高が、それぞれの授業がある中で、お互いを知り、交流授業のテーマの設定を行い、そのテーマに至るまでの小学校や中学校での授業の流れについて、具体的に共有した。時には中学校・高等学校の教員が実際に小学生の授業を見学に行き、小学校・中学校双方の背景を理解した上で交流授業のテーマを深めることができ、意見の交流を行った。

その後、さらに話し合いを進め、1月に中学3年生の公民の授業（廣畑彰久教諭が担当）と小学6年生の社会の授業（彦野周子教諭が担当）の枠を使って交流が行われた。

中学生は、本校の静修修学旅行で広島を訪れるにあたり、事前に学習したこと、また、現地で平和について感じたことや考えたことを踏まえ、本年度発行された各社の新聞記事を基にして、グループごとに新聞を作成していった。小学生は、歴史で第二次世界大戦と原爆投下について初めて学ぶ時期であり、中学生のプレゼンテーションを聞きながら、感じたことをそれぞれ記録していった。

中学生は、実際に被爆体験をされた方のお話を事前に伺い、各教科で学び、実際に広島を訪れた後に、学習の成果を新聞にまとめたことで、知識が整理された上、小学生にプレゼンテーションする中で、自分が知りえたことや実感を、相手に分かりやすく伝わるように創意工夫した。小学生に伝えるという課題を通して、自分が本当にわかっているのか、何を、どう伝えればいいのかを自問自答し、仲間と話し合う中で、自分自身の学びがさらに深まるという体験ができたようであった。

日頃、生徒は自分に近い仲間のみを対象にしているが、小学生という、数年前自分自身も体験したが、今はなかなか交わりが少ない相手とコミュニケーションをとるということ自体が新鮮であったようである。また、普段用いられている「会話」というコミュニケーション手段と異なり、「新聞」というツールは、改めて自分の頭でわかっている考えを言葉にしなければならない。そのため、自分の理解を深めつつ表現する上では大変効果的で、そのことと相まって、さらに違う校種の児童生徒が交流することのメリットを強く感じた。本校は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の4つの校種があり、今後さらに連携し、その可能性について考えていきたい。



交流授業で発表する中学生



児童・生徒の感想はこちら
（兵庫県 NIE 推進協の「わたしの感想 NIE の記事一覧」に移動します）

3 国語表現の振り返りを比較し、新聞を読むことの生徒の意識の変化についてのまとめ

高2、高3の選択授業の「国語表現」で積極的に新聞を活用した授業に取り組んできた。

私が、スクラップした新聞記事を「週刊国語表現」と名付け週に一度、生徒に配布以下のことに取り組んでいる。

- ①記事の概略を解説する。
- ②この新聞記事を範囲にした漢字テストを行なう。
- ③配布した記事から一つ選び約400字で記事についての感想を提出する。
- ④生徒自身も興味のある記事をスクラップし2週間に1度提出する。
- ⑤定期考査では、②で行った小テストと週刊国語表現の新聞記事より出題する。

国語表現では様々な「書くこと」を行うが、書くためにはその前提として今、起こっていることや出来事、人々の思いや状況について知ることが必要で、自分の考えや解決策、さらなる深い考えに繋がりやすいように思う。そこで新聞を使い視野を広げ、今起こっていることについて深める場になればという思いで年間を通じて新聞を使った取り組みを続けている。

具体的には、上記の①から⑤の取り組みをくり返し行っている。週刊国語表現は年間約25回発行し、2年生の最初の頃は生徒にとって負担となっているようでもあるが、毎週ある程度のまとまった量の新聞記事を読むことで、個人差はあるが読み慣れることができ、読む速度も速くなり、重要な所を素早くつかむことが可能になってくるようである。また漢字のテストを行うと高校2年生の時は新聞に出てくる語彙を難しく感じたり、意味が分からなかったりするようであるが、①の新聞記事の内容解説の中で、見出しや、新聞の書き方の特徴にも触れつつ記事を継続して読むことで、語彙を始め、ものの見方・考え方などに触れ、次第に新聞にも慣れていくようである。

これらの取り組みを2年間続けてきた、2021年度の生徒の授業の振り返りから新聞に対する生徒の意識を以下にまとめてみた。

2021年度の「国語表現」選択者の授業の振り返りから

・高校2年生の最後の授業時の振り返り

授業の1年間の「振り返り」から

<u>新聞を読むようになりましたか</u>	読むようになった	19人中16人
-----------------------	----------	---------

↓

・高校3年生の最後の授業時の振り返り

授業の最後の「振り返り」より

<u>新聞を読むようになりましたか</u>	読むようになった	20人中17人
-----------------------	----------	---------

<u>卒業後、これからも新聞を読みますか</u>	はい	20人中16人
	機会があれば	1名
	読みたい	1名
	ネットのニュースは見る	1名
	いいえ	1名

本授業は高2、高3の選択科目であり、高2の生徒は、高校1年生の秋に「数学・国語表現」から選択した生徒である。2年生の秋に3年生の科目選択を行うが、本科目は高2・高3とほぼ継続して選択する。

生徒は、授業内容の概略を知り選択してくるのであるが、それまで実際に家庭で新聞を購読し、毎朝、生活の一部として新聞を読んでいる生徒はかなり少なくなっている。そんな中、授業が始まり、生徒は新聞を読むことと向き合い始め、様々な「書く」体験を重ねていく。新聞を読むことを難しいと感じたり、時にその情報量に圧倒されたり、普段知らなかったことを知り驚いたりしつつ、新聞の面白さに気づき始めることも多い。そして、テレビのニュース番組での言葉が、既に新聞で読んで知っていることに気がついたり、社会のことについて家族と話した時、自分の意見や疑問を話したりした時、自分の中での変化を実感するようである。新聞を読むことを通して感じた生徒の変化を振り返りの中に見つけることがある。また、卒業生が、進学先での取り組みで「高校の時の新聞を読み、考えた体験が役に立った」と聞いた時心が温かくなったこともある。

生徒が残してくれた振り返りを見て、2年間の国語表現の中で取り組んだ、拙い実践ではあるが新聞を読むことを通して、新聞に慣れ、新聞を肯定的なツールとして受け止め、これからの人生の中でも新聞を讀んでいこうというモチベーションは育めたのではないかと思っている。

4 おわりに

新聞をとらない、読まなくなったと言われて久しいが、新聞と出会う体験だけでなく、新聞を継続的に読む経験を中高生の間にたくさん積むことができると、新聞本来の良さや、必要性を知り、世の中への関心などにもつながるのではないかと改めて思う。

多くの学校が、生徒一人1台のデジタルデバイスが実現している環境となり、NIEを実践する環境も大きく変わってきた。

この2年間の実践も、2019年度の終わりから2020年度の初めにかけてコロナ禍による全国一斉の臨時休校の中で始まり、公開授業やセミナーもリモートでの実施になり、全国大会や実践発表会の形態も大きく変化した2年間であり、可能な限り、ICTなど変化も取り入れながら実践ができたのではないかと思っている。しかし、変化の激しい時でSNS全盛の今だからこそ、今起こっていることの意味、更には未来や明日を考えるためにも「新聞」というメディアが果たす役割はさらに大きくなっているように思う。生徒が、そんな新聞というメディアと出会い、新聞を知り、新聞を読む習慣を身につけることはきわめて大切な事ではないかと思う。

いずれにしても、従来からある新聞の役割を大切にし、活かしながら、変化の中でのより良い在り方や繋がりを探し求めていかなければならないと思う。そういう意味でこの時代の新聞の利活用はまだ緒に就いたばかりだと思う。

この春から成人年齢が18歳になる。災害や感染症に加え、戦争に関する記事も多く目につくこの頃である。世界で今起こっていることをしっかり見つめ、より多くの人が、より良く生きるためにも、この2年間の実践を心に刻み、これからは活かしていきたい。

新聞をより身近なものに

～情報科と探究活動の取り組みを通じて～

蒼開中学校・高等学校 校長 阪口 寛明
教諭 奥村 智紀

1. はじめに

本校は、淡路島にある唯一の私立中学校・高等学校であり、中学3年コース、高校3年コース、中高一貫6年コースと様々なコースに分かれ、全校生徒298名が日々学習に励んでいる。高等学校は、令和2年に男子サッカー部が兵庫県準優勝に輝き、令和3年には女子硬式野球部が全国ベスト8に進出するなど、近年は部活動に関する活躍が目覚ましい。

本校はNIE実践指定校となって2年目になる。前任担当者の太田柊教諭は「新聞を読むことを通じて、多くの情報で溢れる現代社会で必要となる情報リテラシーと自分の考えを他人に伝える発信力を身に付けて欲しい」との考えのもと、NIEワークシートを活用した学習や、実際に新聞のコラム欄を書いてみるということにも挑戦した。2年目となった今年は、高校からの教科である情報や探究活動とも連携しながら、生徒にとって新聞がより身近なものとなって欲しいということと、新聞記事という「情報」を適切に活用できる能力、すなわち情報リテラシーの育成を主眼においた活動を展開した。また、今年は中学3年生～高校2年生といった幅広い学年でNIEの活動を取り入れてみた。

2. 情報科における活動

平成21年告示の高等学校学習指導要領(情報編)では、「情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる。」とある。つまり、「コンピュータを適切に扱う能力」と「情報モラル・セキュリティや法規に関する知識の養成」の大きく二つの教育目標があると私は理解している。情報の授業では、これらの教育目標を達成するための一つの教材として、新聞記事を活用したいと考えた。

令和3年度における蒼開中学校・高等学校の最大の転換点は、中高ともに新入生に対して1人1台端末(Chromebook)を導入したことであろう。令和2年度はコロナ禍における臨時休校があり、リモート授業などの対応に迫られた。そういった経緯から1人1台端末を導入したのだが、このChromebookをNIEの活動でも取り入れた。

授業や朝学(SHR前に行われる5～10分の学習活動)でNIEワークシートを継続的に取り入れたのだが、このワークシートをChromebook上のアプリケーションを使って回答したり、ワークシートの内容を発展させて調べ学習やレポート作成に取り組むということ、情報の授業で行った。ただ単に調べた内容を文字で入力するだけでなく、調べた統計資料を「スプレッドシート」という

表計算アプリケーションを用いて表にまとめたり、グラフ化することで、Chromebookの操作能力も養えたと感じている。また、令和3年9月から発足したデジタル庁に関する新聞記事を取り上げ、デジタル庁発足におけるメリット・デメリットを調べる活動も行った。この活動をとおして自身の考えを持って新聞記事を読むとの大切さや、情報セキュリティやモラル・リテラシーについて考える機会が得られたと思う。





3. 探究活動との連携、記者派遣事業

探究活動では、昨年度から中学3年生のクラスにおいて SDGs について調べたり発表したりする活動を取り入れており、今年度も SDGs と NIE を絡めた活動を展開したいと考えた。SDGs の活動では、自分自身で課題を発見・設定し、その課題を解決する、問題解決能力の育成を目指した。2 学期には環境問題の観点から「プラスチックごみと海洋汚染」をテーマに班に分かれて学習を進め、9 月 29 日(水)の発表会には、特別講師として京都大学名誉教授の内藤正明先生にお越しいただき、講評と講演をいただいた。また、12 月 14 日(火)には、前述の内藤先生と淡路島を拠点に活動している NPO 法人「SODA」¹の松村亮平氏のご協力を得て2時間分のワークショップを展開した。そのワークショップの中で、「淡路 de SDGs」というテーマで、用意された新聞記事から SDGs17 項目に関する記事を見つけ、それらを班ごとにまとめて発表するという活動を行った。SDGs についての理解が深まりつつ、新聞記事から淡路島に関する地域的话题をピックアップして読むという機会を設けることができた。

また、10 月 6 日(水)には今年度の記者派遣事業が行われ、読売新聞社大阪支局の加藤律郎様にお越しいただき、新聞をより身近なものに感じてもらうために「新聞記者の仕事とは？」というテーマでお話しいただいた。探究活動では進路学習も行っているのだが、その進路学習の観点からも記者の仕事というところからお話しいただくことと



なった。お話しの中では、阪神・淡路大震災の生々しい取材体験や、その他の災害現場での取材体験をお話しいただいた。また、実際に取材で使う道具や機材を持参していただき、生徒がそれに触れる機会も提供いただいた。実際にカメラを手に取った生徒からは「思っていたよりも重かった」「こんな重い物を持ちながら取材をするのは大変そう」という言葉が聞かれ、新聞記者という仕事を肌で体感する良い機会になったのではないかとと思われる。

そして、年度末の3月15日(火)には、高校2年生全クラスを対象に3、4時間目の時間を利用して主権者教育を行

¹ “Social Design center Awaji” の略。『誰もが役割や仕事を持ち、みんながいきいきと笑顔で暮らせる淡路島』を目指して、平成23年に設立された。

った。講演では、時事通信社の丸山氏と神戸新聞の三好氏をお招きし、新聞社の選挙での取材の方法を紹介していただいた。また、生徒たちはロールプレイング形式で模擬投票を体験し、選挙の仕組みを肌で体感する機会も提供していただいた。

選挙権年齢が18歳で引き下げられ、参政権を目前に控えている生徒たちにとって、投票への認識を高める良い機会を得ることができたと感じている。



4. NIEに関するアンケート

令和2年度は1年目ということもあり、生徒に興味、関心を持ってもらうということを軸に、前任担当者が教育活動を展開した。令和3年度は、私の授業担当が情報科ということもあり、授業のなかで情報科の教材の一つとして新聞記事を用いて授業を展開し、情報科で必要な知識・技術を学びつつ、新聞記事に触れる機会を増やし、新聞をより身近に感じてもらえるような活動を展開した。また、探究活動で展開していたSDGsや進路学習と絡めて活動することによって、新聞の記事(話題)と自分のことを重ね合わせて考える機会を提供した。

この2年間の取り組みの成果を示すものとして、過去2年間で計3回、NIEに関するアンケートを実施した。以下にその結果を示したい。

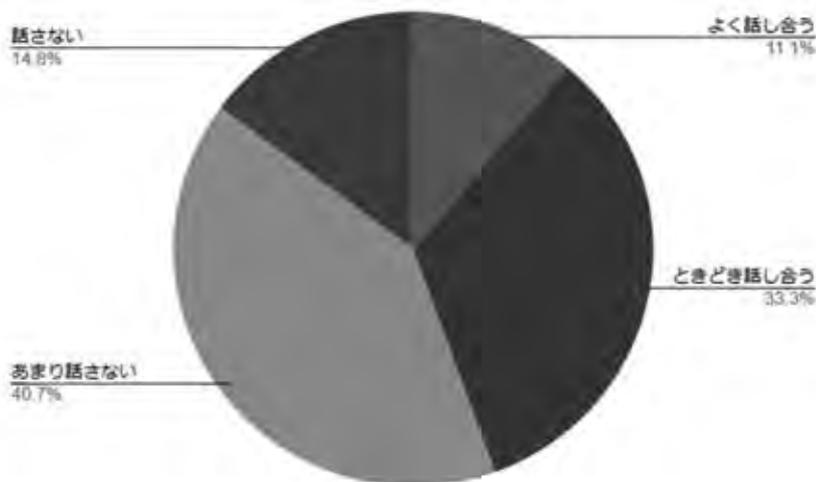


図1：第1回(令和2年4月)実施

NIEに関するアンケートの8項目目に「家族や友人と新聞記事やニュースについて話し合いますか?」という問いがある。NIE実践指定校となって間もない、当時中学3年生であったクラスを対象に実施した令和2年4月のアンケートでは、その8項目目の問いに対し、「あまり話さない」と「話さない」の割合約56%と過半数を占め、「ときどき話し合う」と「よく話し合う」の割合が約44%という結果になった。(図1参照)

次に、NIE実践指定校となって約1年が過ぎようとしていた令和3年3月実施のアンケート(図2参照)では、「ときどき話し合う」と「よく話し合う」の割合が約63%と増加しており、過半数を超えた。1年の実践の成果が徐々に現れているように感じる。

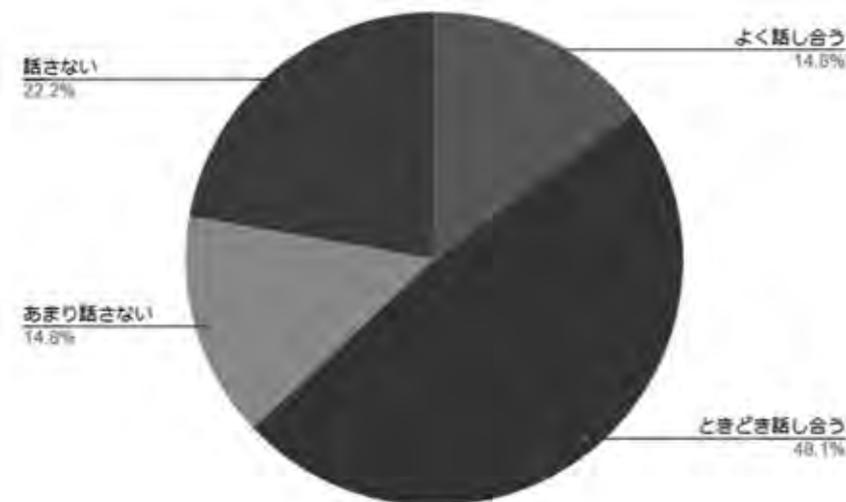


図 2：第 2 回(令和 3 年 3 月)実施

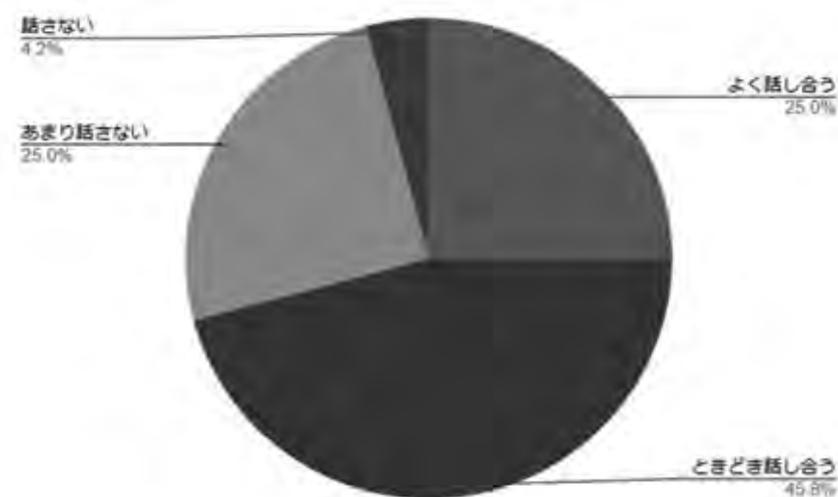


図 3：第 3 回(令和 4 年 1 月)実施。

そして、私が NIE 担当となり、実践指定校となって 2 年目に実施したアンケートでは、令和 4 年 1 月にアンケートを実施した。情報科や探究活動の時間を利用して NIE を展開してきた結果、「ときどき話し合う」と「よく話し合う」の割合が 70%を超え、担当者が変わっても一定の成果が見られた。(図 3 参照)

上記の「NIE に関するアンケート」の結果から、新聞記事やニュースに対する興味・関心が、NIE の活動を重ねるごとに増加しており、昨年度からの前任担当者の取り組みを含め、情報科や探究活動を通じた NIE の学習の取り組みの効果が、アンケートの数字として現れていると考えられる。

5. まとめ

本校の生徒のみならず、子どもの活字離れ、新聞離れが叫ばれて久しい。前述のアンケートから、本校はこの 2 年間の取り組みで生徒の新聞記事に対する興味関心は着実に増加していると言えるだろう。

実践指定校 3 年目となる令和 4 年度は、これまでの取り組みと同様、授業の中で新聞記事(ワークシート含む)を取り扱い、継続して新聞記事に触れる機会を設けたい。また、今まで実施できていない新聞社への見学など、これまで以上に新聞そのものに触れる機会を増やして新聞への興味・関心を促しつつ、情報を正しく活用する能力(情報リテラシー)の育成も図りたい。

続・新聞で教室を社会とつなげよう！

神戸山手女子中学校高等学校 校長 平井 正朗
教諭 近藤 隆郎

1. はじめに

本校が NIE 実践指定校として取り組む機会を与えていただくのは、2017・18 年度以来のことで、今回が 2 度目である。その間、わずか 3 年しか経っていないにも関わらず、新聞購読者の減少が進み、定期購読をしていない家庭が増えたことが実感される状況にある。しかしながら、このような状況であるからこそ、学校で新聞を教材として用いることの重要性が増していると認識している。また、2020 年 1 月より続くコロナ禍により、それまでの当たり前の授業スタイルが一変することとなった。そこで今回は、在宅学習や ICT 化などを前提として、アナログとデジタルそれぞれの特性を活かした取り組みを行い、新聞活用の可能性を見いだすことに努めた。これらは同時に、来春から実施に移される高等学校の新学習指導要領でうたわれているものと軌を一にするものであると捉えてもいる。

2. 実践テーマ

「続・新聞で教室を社会とつなげよう！」

3. 実践の概要

①年間購読と閲覧コーナーの設置

前回と同じく、一般紙のほかに英字紙と経済紙を入れ、英語科や社会科の専門的な利用に供することを目指した。また、地元紙を入れることで自らが報じられる機会に活用されることを期待することとした。

新聞立ては食堂内に設置し、自由に閲覧出来るようにした。また、新聞を購読していない家庭が少なくないことや資源の有効利用の観点から、前日以前の新聞を生徒が持ち帰ることを引き続き可としている。

購読紙	購読月
朝日ウイークリー	5・6・7・8月
産経新聞	5・6・7・8月
神戸新聞	5・6・9・10月
Japan News	9・10・11・12月
日本経済新聞	9・10・11・12月
毎日新聞	12・1・2・3月

②授業内の取り組み

社会科を中心に、各教員が記事を授業で取り上げるなどしたほか、夏休みの課題、コンクールへの応募、定期考査への紙面からの出題などで新聞活用を進めた。また、高校の公民科の授業では、これまで同様『ニュース時事能力検定公式テキスト』（毎日新聞出版）を用いて新聞をより深く読む授業実践を続けた。あわせて、NIEをテーマに掲げて研究授業を実施した。

③投稿掲載紙面等の授業での活用

従前より、学校や生徒の活動が記事として取り上げられたものを用いて授業を行ってきたが、これに加えて、生徒に読者欄への投稿を促し、掲載されたものを用いて授業を行うことに取り組んだ。いずれも生徒達の大きな励みになるとともに、新聞との距離感が大いに縮むことが見てとれた。なおこの取り組みは、日本新聞協会の「新聞を活用した教育実践データベース」にも掲載されている。

Box 誰かのための努力と行動

私は好きなアーティストがいます。私は彼らをよく尊敬しています。彼らは、このコロナ禍というファンの人には、想い通りに活動できない苦しい状況の中でも、ファンのことを思い、曲を作ったり、日本のテレビ番組に出演したりしてくれています。

「直接会えなくても皆の心に残る音楽をこれからも届けていきたい」彼らは本当によくその言葉を口にしますし、必ず有言実行します。音楽をしている私も、この気持ちを忘れたいと思いません。今まで誰も経験したことのないこの状況で、自分の精神をコントロールすることも難しい中で、たくさんの方の希望になり、元気づけることのできる彼らは本当に素晴らしいと思います。

そんな彼らのことを少しでも知ってほしいし、私も誰かのために努力し、行動できる人になりたいと思います。

富田 恵 16歳
（高校生 加古川市）

神戸新聞 2021年4月30日朝刊

Box 努力を惜しまず

今まで母に「あんたは何をやっても中途半端だ」と言われてきた。小さい頃からエレクトーンを習ったけれど全国大会を目指しても地区大会にすら進めなかったし、グランドの風を受けても簡単に通る6級までしか取れなかった。練習が嫌いだ。サボっては怒られるの繰り返しだった。3年生でやめた。中途半端な気持ちで続けたから結果も中途半端だったのだと思う。中学1年生の時に、トランペットという楽器に出会った。部活で吹き始めて、高校では音楽科に入って本格的に始めた。演奏する先輩の姿がカッコよくて、トランペットが好きになった。中途半端なままではかっこいい先輩に追いつけない。中途半端な自分から抜け出したくて、自分の首にまっすぐに向き合うことが努力するということなのだ。ようやく気づくことができた。これからは誰にも中途半端だと言わせない。何事にも努力を惜しまず常に向上心の塊でありたい。

杉野 朱音 18歳
（高校生 神戸市北区）

神戸新聞 2021年5月15日朝刊

Box 高校生活 半分以上が「コロナ」

高校生の最終学年になりました。高校1年生の時に新型コロナウイルスが流行しはじめました。そんな私たちも、もう高校3年生です。

高校生ライフの半分以上「コロナ」という言葉がついてきています。

昨年の3月、修学旅行でシンガポールに行ける予定でした。私は同じ月に海外留学にも行ける予定でした。その全てがコロナによってなくなりました。

校外学習、球技大会、文化祭の出店、部活動の試合、楽しいこと「高校生の思い出」といわれているものがどうしても薄くなっています。

卒業アルバムはどうなるんだろうとまだ先のことですが心配しています。

新型コロナウイルスで同じように悲しんでいるのは全世界共通ですが、どうしても悔しい気持ちでいっぱいです。マスクなしで大変で笑っている高校生ライフ、送りたかったなあ。

富田 美登 17歳
（高校生 神戸市東灘区）

神戸新聞 2021年6月1日朝刊

Box 日常が大きく変わったが

私たちの日常生活が大きく変化させてしまった新型コロナウイルス。

今まで当たり前できていたこと、楽しみにしていた行事などが中止となり、マスクを着用した生活をしなければならなくなりました。

新型コロナウイルスが流行し始めた昨年暮から1年余り。

今もなお続行し続けていて、私たちはコロナと隣り合わせの生活が当たり前となっていると思う。

そんな中でワクワクができ、効果があるとされてきた半面、マイナスなニュースを目にするのも少くない。

何が真実で何がうそなのか、どのニュースを見ても心から信じていることができません。いつ終息するかも分からないため、不安な毎日を送っている。

思い描いていた高校生とは違ったけれど、コロナ禍でも何かしら楽しめるよう、残りの高校生活を大事にしていきたい。

杉野 朱音 18歳
（高校生 神戸市須磨区）

神戸新聞 2021年7月17日朝刊

④コンクールへの応募・入賞

下記のコンクールに応募し、入賞した。

- ・「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）：学校奨励賞
- ・「ひょうご新聞感想文コンクール」（神戸新聞社主催）：E（高校生）部門
神戸新聞社賞 高等学校3年生 桑野葵

また、教員が投稿した文章が「ビブリオエッセー」（産経新聞）で7月の月間賞に選ばれたことから、これを授業で教材として取り上げた。

⑤記者派遣事業

高校3年生の選択科目・時事研究に、神戸新聞社のNIE推進室室長・三好正文氏をお迎えし（9月22日）、「主権者教育」をテーマに2時間にわたって講演をしていただいた。



神戸新聞 2021年9月23日朝刊

⑥「2021年度NIE兵庫セミナー」

愛徳学園とともに「記者授業とタブレット体験ワーク～ICT（タブレット／プロジェクター・ソフト）を用いた新聞活用学習の実際～」と題して「2021兵庫NIEセミナー」（6月23日）を実施した。本校では、来場された15名とリモート参加の約90名を対象に「ICT初心者対象タブレット、プロジェクターを用いたNIE授業」体験をしていただいた。なお、当日の様子は、兵庫県NIE推進協議会のHPで紹介されている。



4. 生徒の感想より

「もっと自由に読んでいい」

神戸山手女子高等学校 普通科 3年 桑野 葵

学校で NIE 教育を受けるまで、私は新聞と SNS は全くの別物だと思っていた。しかし、授業や実際に紙面を読む経験を通して、二つのメディアには多くの共通点があると気付いた。

きっかけとなったのは、「新聞は、最初から全てを読もうとするのではなく、見出しに興味を持ったものから、むしろそれだけ読んでいい」という先生の言葉だった。これを聞いたときに私は、まるで SNS をチェックするみたいだ、と思った。そのようにかいつまんで見ていくと、案外楽に読み終わることができた。「新聞には字がいっぱい書いてある！」ともはやアレルギーのように敬遠していたが、私たち若者は日頃の SNS 利用のおかげで、短文を連続で読むことは得意なのだと思う。

これまで新聞が担ってきた役割に、インターネットが進出してきている。ならば逆に、「新聞を SNS のように読む」ことも可能なのではないか。SNS と新聞の大きな共通点の一つは、「必ず利用しないといけないものではない」ということである。両者とも「更新され続ける資料集」のように便利に利用するものだと捉えればいいのではないか。若者が新聞を読む世の中になるには、新聞対インターネットの二項対立で語るのをやめ、「ネットでもいいし、新聞でもいい」という状況をつくるのが大切だと思う。また、新聞独自の利点もある。例えば、SNS より“じっくり”読めるところだ。個人的には、自己主張・自己実現が尊ばれる現代社会においては、メディア内に他の読み手の意見が介在しにくいという点において、むしろ新聞の方が時代に合っているのではないかとさえ思う。新聞はもっと自由に読んでいい。そう気付かせてもらえたことが、3年間の NIE で私の一番の宝となった。

5. 1年目を終えて

新聞を単に情報を得るための手段とするのではなく、未知の世界と出会うための入り口とすること。それによって新聞を読む習慣のない生徒にその有用性を気付かせることができるとの思いを新たにした1年だった。

新聞は情報の宝庫であり、背景知識を強化するには最適な教材である。今後も新聞を言語材料にして、探究的・教科横断的・学際的なアプローチを継続することによって、論理的思考力を涵養し、課題発見・解決力を構築すべく邁進していく所存である。

【 高 等 学 校 】

N I E を活用した課題発見・課題解決能力育成のための探究活動

兵庫県立神戸高塚高等学校 校長 高本 正道
教諭 伊東 琢磨

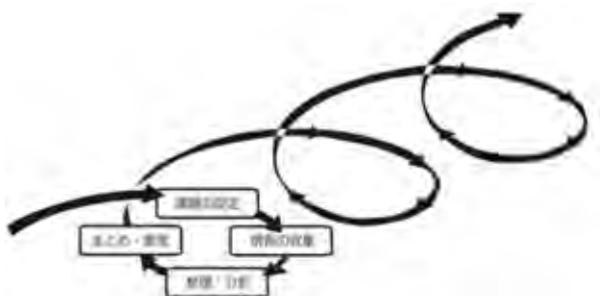
1 はじめに

本校は創立 39 年目の全日制普通科高等学校です。令和 2 年度から“地域社会の諸課題を発見し、解決しようとする姿勢を育む”「地域創造」類型を立ち上げ、特色ある活動を行っています。

また本校では、「総合的な探究の時間」を、1 年「探究基礎・特色探究基礎」、2 年「探究 I・特色探究 I」、3 年「探究 II・特色探究 II」と設定し、探究活動を計画的に行って 3 年目となり、本年度に 3 年間のプログラムが完成しました。したがって、本年度行った 1 年生対象のプログラムは過去 3 年と全く同じものとなります。

2 本校の探究活動の概略

本校の探究活動では、「課題の発見・設定」「情報の収集」「情報の整理・分析」「まとめ・表現」の「探究プロセス」を繰り返すことで、「正解のない問い」に取り組もうとする姿勢や、より深く考える力を育成できるようにプログラムが組まれています。



(高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編より)

1 年生では、1 学期に「自己と他者を知り、

自分の意見を表明する」ことを目的として 1 分間スピーチを行い、発表時の基本的スキルの重要性を認識します。夏季課題として新聞等から自分の気になった世界や日本社会、地域社会の諸課題について情報を収集します。2 学期に個人で集めてきた情報を基に班として情報を整理・分析し、諸課題について班で発表します。3 学期に、諸課題についての解決法についてさらに探究し、発表します。一連の「探究プロセス」を他の班員と協働して体験します。

2 年生では、1 年生の時に班として複数の人間で行った「探究プロセス」を、個人で再度経験します。個人の興味・関心・進路に応じて「探究テーマ」を設定し、1 年をかけて「探究プロセス」に従い探究活動を行います。分野別に 8 のゼミに分かれ、1 年をかけて探究します。探究した内容は、3 月実施の探究 I 発表会で発表します。今年度は、コロナ対策で発表者を少なくし密にならないように実施したため、選抜された生徒が、1 年生全員と 2 年生の選抜されなかった生徒の前で発表することとなりました。

3 年生では、1 学期までに 2 年生の 1 年間で探究した内容を文章化します。レポートや小論文の形式を学び、自分の意見を文章で表現することを学びます。

2 学期は、2 年から取り組んで論文を書いたテーマについてさらに深く掘り下げて探究したり、新たな探究テーマを設定して 3 度目の探究プロセスを体験したりして、最後に発表します。そして 3 年間の総まとめとして探究

活動を振り返ります。

本校の3年間のプログラムは、「内容知」を大切にするのはもちろんながら、同じプロセスを何度も繰り返すことで、「方法知」を身に付けることに主眼を置いています。

3 探究基礎・特色探究基礎での取組

NIE 指定校として新聞を探究活動に活用することができました。6,7月と9,10月に6紙を毎日提供していただきました。1年生は5クラス編成で、特色類型28名がいますので、ちょうど6紙を毎日新聞社を変えて、6教室へ配付し、いつでも読めるようにしました。

(写真参照)

「探究プロセス」の「課題の発見・設定」「情報の収集」のステップに6紙の新聞を活用することができるのは非常に大きなメリットです。



現代社会に何が起きているのか、自分の所属している地域社会にどのような課題が存在するのかを新聞記事を通して見つけ出します。同じ題材でも、情報の扱い方やアプローチの仕方が6紙で違って、どのように題材を切り取り、どの観点から何を伝えているのかを比較することは、多角的な視野を得るのに非常に有意義でした。

また、新聞記事を読むときには「事実」と「意見」の違いに着目して、情報を整理・分類したりする方法について学びます。記事の中でも表現の方法によって「事実」を伝えているのか、新聞社や新聞記者の「意見」を伝えているのかを区別できる力を身に付けられるようにします。「意見」と区別した「事実」に基づいて実際に何が起きているのかを理解して、判断する力を身に付けます。インターネット上の情報やテレビ・新聞等の大手メディアの情報を鵜呑みにすることなく、自分で判断し活用

できるように、複数のメディア、情報ソースによる情報の信ぴょう性の確認、出典の重要性等に焦点をあて、玉石混交の情報をどのように扱うかについて学びます。

また、兵庫県 NIE 推進協議会の記者派遣事業として、昨年度は Zoom の録画特別講義を夏季課題として、情報の扱い方や新聞の役割について学びましたが、今年度は、令和3年12月、情報をどのように分析しまとめ発表するのかという観点から「記事を書くために大切なこと」という題目で、産経新聞社神戸総局岸本佳子総局長に講義をしていただきました。その講義では、「5W1H」と「逆三角形」というキーワードをもとに、わかりやすく情報をまとめることを教えていただきました。



1年生の2学期以降は班で探究活動を行うことを想定し、教員のアドバイスを受けながら他の班員と協働して、意見を交換しながら多面的に情報を整理・分析することを学びます。

このプロセスで、他の人の意見を聞き、新しい視点に触れて生徒は、一つの事実を多面的に捉えることを体験することになります。

こうした作業を経て、2学期最後に各班で見つけ出した諸課題について、まとめ、発表をします。

今年度は ICT 機器を発表に導入し、A1 サイズのポスター、A3 サイズの紙を写真で取り込んでモニターに投影、パワーポイントでの発表を行いました。



3学期には、2学期で見つけ出した諸課題についての解決策や対処法について、様々な情報に基づいて探究し、まとめ、発表しました。これと同じ題材を用いて、2度「探究サイクル」を経験したことになります。

4 探究I 発表会

2年生は「探究I」（総合的な探究の時間）で、1年間を通して、個人の興味関心・進路に応じて設定されたテーマに基づいて探究活動をし、再度「探究サイクル」を経験しました。

1学期に「探究テーマ」を設定して、2学期末に中間発表を行いました。そこで指摘された問題点や、指導教員やゼミ内の他の生徒からのアドバイスを活かして探究活動を続け、最終発表を3学期2月にゼミ内で行いました。

3月には、各ゼミの代表者54名が14教室に分かれて1年間の活動の成果を発表しました。1年生は聴講希望によって、2年生は他ゼミの生徒の発表を聴講できるよう考慮し、一人ひとりの興味・関心、進路に応じて設定された探究テーマについての発表を聴講しました。

1年生は、「探究プロセス」を複数の班員と協働しながら経験し、探究の基礎スキルを身につけた上で、堂々と発表する先輩たちの姿を見て、来年度に自分は何をすることになるのかを具体的にイメージします。

2年生の特色類型の生徒が司会とタイムキーパーの役割を果たし、生徒自身の手で運営された発表会となりました。

5 生徒アンケート

NIEに関する1年生対象のアンケート結果は次の通りです。

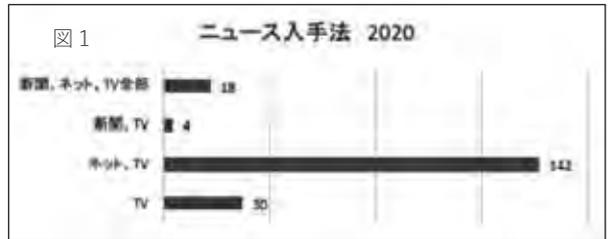


図1によると、ニュースの入手法は、2年間で大きな変化はなく、ほとんどがインターネットとテレビとなっており、新聞を利用してゐる人が非常に少なくなっています。



図2から新聞を購読している家庭の数は減っています。新聞を読む機会は昨年度と大きく変わっていないようです。

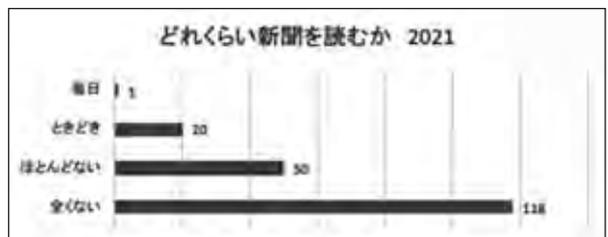


図 3 によると、今年の 1 年生の方が新聞を読む頻度はわずかながら増えました。それでも 60%以上の生徒は新聞を全く読まないという回答しています。このことに関しては、新聞が日常生活の中にあるという環境がない中で、どのように新聞に触れる機会を増やすかという問題に集約されると思われます。

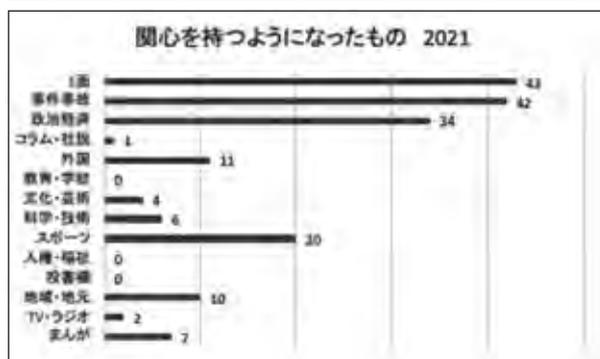
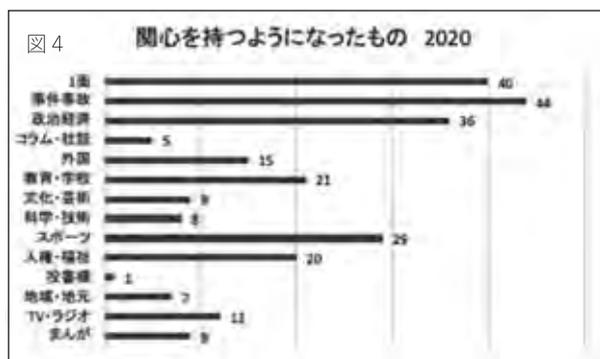
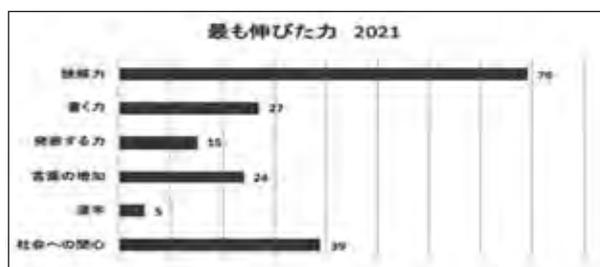
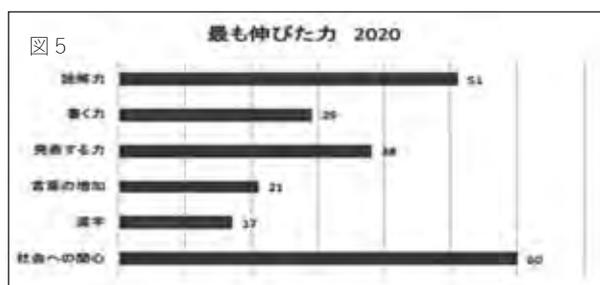


図 4 から、前年と比較してみると、大きな傾向は変わっていないことが見て取れます。昨年度同様、1 面、事件や事故、政治・経済、スポーツに関心が高くなったことは望ましいですが、人権・福祉に関心を持つようになった生徒の数が減っていることが懸念されます。



また図 5 から、昨年度と比較すると読解力が身についたと考える生徒がかなり増えていきます。また昨年度同様、社会に関心を持つようになった生徒もいます。

生徒たちは、NIE の活動を通して、記事を読み取る力が身につき、自分たちの考えを書いてまとめ、発表することができるようになったと感じているようです。

6. 最後に

新学習指導要領に基づいて総合的な探究の時間を 3 年前に始めました。3 年間のプログラムを今年度完成させることができました。1 年生対象のプログラムは 3 回目となり、新聞の活用法を含めて、安定して実施できるようになってきています。3 年間の探究活動の初年度に新聞を活用して探究活動の基礎となる以下の 5 つ力の育成を目的として、探究活動を計画的に実践しています。

- 1) 自分の所属する社会・地域への興味関心
- 2) そこにある課題を発見する力
- 3) 情報を収集・整理・分析する力
- 4) 班員と協働して作業をする力
- 5) 自分たちの考えをまとめて発表する力

情報の多くをテレビ、インターネットから得て、新聞を目にする機会が減ってきている生徒にとって、6 紙もの新聞に 4 か月間触れられるこの機会は非常に貴重なものといえます。

令和 4 年度の県立高等学校の入学生は B Y O D (Bring Your Own Device) によりタブレットを一人一台購入します。今まで以上に情報にアクセスしやすく、また大量の情報を扱うことが可能となります。時代が大きく変革していく現代で求められる力の育成を目指し、プログラムの改善に取り組み、よりよい探究活動を生徒に提供できることを目指します。

SDGs の視点に基づく探究学習

— 課題発見と調査内容のまとめ方に NIE を活用する —

兵庫県立兵庫高等学校 校長 升川 清則
教諭 岩見 理華

1. はじめに

本校は、平成 27 年度に、文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定を受け、5 年間をかけて創造科学科と課外で活動するグローバルリサーチコースの生徒 (各学年 30 名程度) を対象に、「“課題先進国”日本を担い世界に羽ばたく『未来の創造者』」をテーマに、「科学的思考力」、「複眼的思考力」、「社会創造力」、「自律的活動力」の 4 つの力の育成を目標に教育活動を推進してきた。また、平成 29 年にはユネスコスクールに加盟を承認され、ESD の推進拠点としてあらゆる教育活動において SDGs の視点に基づく教育活動を展開している。SGH 終了後の令和 2 年度からは SGH ネットワーク参加校に認定されるとともに、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(グローバル型) に新たに指定を受け、SGH の取り組みを踏まえて普通科にも活動の場を広げ、学校全体でグローバルな視点を持って地域を支えるリーダーの育成を目指している。また、同年兵庫県教育委員会より「兵庫型 STEAM 教育実践モデル校」として指定され、文理融合型教育の展開を目指す研究開発を進めている。

2. 本校の教育活動における NIE の位置付け

令和 3 年度は、「NIE 実践指定校」2 年目の継続校として、昨年度に引き続き第 2 学年の「総合的な探究の時間」(兵庫型探究学習:以下「ひょうたん」)(新学習指導要領先行実施、週 1 単位)に NIE の活動を導入した。本校の「ひょうたん」では、①SDGs のテーマに基づく教科横断的・総合的な学習を通じて知識を深め、幅広い視野を養い、②地域の課題を自分事として捉え、その解決に向けて他者と協働する力を育成することである。そして、③学習の成果をスライドやポスターにまとめて発表することを通して ICT 活用能力を高めるとともに表現力を養う、ことを目標としている。新聞記事の活用は、研究テーマの発見や関連する知識の習得に位置付けている。また、今年度は、記者派遣事業を利用して、調査内容をまとめる手法について学ぶ機会とした。表 1 は、本校が分類している 10 の SDGs の分野である。生徒たちは、原則 4 名 1 組のグループで、興味・関心のあるテーマを設定し、課題解決に向けた提案を行う探究学習に取り組んでいる。

事前に行ったアンケートの結果、本校生徒の家庭における新聞購読率は約 60%で、テレビ以外の情報の入手方法については、「インターネットから」が約 87%、「新聞とインターネットから」が 13%であり、日頃新聞に目を通す習慣がないことがわかった。また、NIE について、「あまり知らない」が約 20%、「知らない」が約 80%と、NIE についての認知度は低く、「これまで自分で選んだ新聞記事を授業で活用したことがあるか」ということについては、約 70%の生徒が「年に数回程度」、約 30%の生徒が「活用したことがない」と答え、

普段の学習に新聞を活用した経験がほとんどないこともわかった。しかしながら、「教育(授業)に新聞を活用することに意義があると思うか」という問いに対しては、「大いに意義がある」が約 20%、「ある程度意義がある」が約 64%と肯定的な回答が 8 割以上を占めたことから、「ひょうたん」の探究学習における NIE の活用は大いに効果が期待できると考えた。

表 1 本校が分類している SDGs に基づく研究テーマ

分野		SDGs の目標	
A	貧困と飢餓	目標 1	貧困をなくそう
		目標 2	飢餓をゼロに
B	健康と福祉	目標 3	健康と福祉
C	教育とジェンダー平等	目標 4	質の高い教育をみんなに
		目標 5	ジェンダー平等
D	水	目標 6	安全な水とトイレ
E	エネルギー	目標 7	クリーンエネルギー
F	持続可能な経済	目標 8	働きがいも経済成長も
		目標 9	産業と技術革新の基盤をつくろう
		目標 10	人や国の不平等をなくそう
		目標 11	つくる責任つかう責任
G	まちづくり	目標 12	住み続けられるまちづくり
H	自然環境	目標 13	気候変動
		目標 14	海の豊かさを守ろう
		目標 15	陸の豊かさを守ろう
I	平和と公正	目標 16	平和と公正をすべての人に
J	パートナーシップ	目標 17	パートナーシップ

3. 実践の内容

(1) 新聞ワーク

1 学期は NIE 推進協議会より提供を受けている新聞(写真 1)の記事も活用しながら、「新聞ワーク」に取り組んだ。「新聞ワーク」では、自分が興味を持った記事を持ちより、まずは、個人でワークシートに記事の要約を 3 つ程度のキーワードとともに簡潔に 3 行程度にまとめ、記事についての感想を書いてから、グループで意見を交換した(写真 2、写真 3)。



写真 1 新聞ワークで使用する記事を探す



写真 2 新聞ワーク(個人活動)の様子



写真3 グループディスカッション



写真4 SDGs付箋を使ったワークショップ

(2) 朝日新聞主催「SDGs付箋を使ったオンラインワークショップ」

令和3年5月17日(月)に、朝日新聞本社CSR推進部NIE事務局幹事の遊佐美恵子氏を講師として各クラスをインターネット会議システムで接続し、「身近なことを世界とつなげる」をテーマに講演会およびワークショップを実施した。本授業の目的は、SDGs関連の新聞記事や写真などから世界との関わりを考えるとともに、SDGsの観点で記事を読み、SDGs付箋で思考を見える化し、多様な意見や考えを学びつつ、身近なこととつなげていくプロセスを体感することである。提供された新聞記事は、ヤングケアラー、プラスチックゴミ、世界食料計画、男女格差等の課題に関するもので、SDGsの1つの目標だけでなく、さまざまな目標と相互に関連付けて考えさせられるものであった。

以下に、活動後の生徒の感想(一部抜粋)を記載する。1つの記事について意見を他者と共有することで、様々な視点から物事を考える視点を獲得することができたようである。

- ・SDGsに基づいた自分たちの意見を「見える化」することでまとめることができ、よかったと思った。
- ・ワークショップをすることにより自分だけでは考えることができなかった意見を取り入れることができ、新しい捉え方を学ぶことができたのでよかったです。
- ・ひとつの記事の中に多くの問題があるとわかったし、他の人の色々な気づきを見ることもできて面白かったです。
- ・付箋を貼りに行くと、自分は思いつけなかった意見が多く驚きました。クラスなど多数で活動することで、違う視点を共有できることを改めて感じました。
- ・いつもは素通りしているニュースや情報も、「なんでなのだろう」と疑問を持ったり、SDGsとの関連を考えてみることで興味が深まり、楽しい活動になるのだなと思った。これからの探究の授業が楽しみだなと思う。

(3) 兵庫県NIE推進協議会主催「記者派遣事業」

令和3年10月4日(月)、新聞記者の取材の経験についての講義を聞き、探究活動で行った調査をまとめるときの視点や注意点について学ぶことを目的に、各クラスオンラインで「記者派遣事業」を実施した(写真5)。講師の時事通信社神戸総局長の丸山実子氏からは「調べ、まとめ、伝える」というタイトルで日本国内・海外における取材経験についてお話をうかがった。コロナ禍における高齢者の介護についての調査結果をもとに、結論を明確に伝えること、データなど根拠を示すこと、調査のプロセスも大切であると説明していただき、以下の生徒の感想からも講演の趣旨がよく理解できていたことが読み取れる。

- ・結論だけに目を向けてはいけないのだと思った。結論に辿り着くまでに自分が調査したことには、全体の流れを通してどんな意義を持っていて、どんな関係性があったのかということをしかりと確認した上で探究内容に組み込むべきだと感じた。だから、過程を大切にするというのは探究活動を進めるにあたって重要になると思う。
- ・調べたことをそのまま伝えるということも大事だけれど、調査や研究で得た情報を鵜呑

みにするのではなくきちんとした根拠を持つことや、情報を取捨選択するなどしてどうすれば相手に伝わるのかということを考えてまとめる力が必要なのだとわかった。今回の講義は必ずこれからの探究の役に立つだろうと思った。



写真 5 記者派遣事業



写真 6 高校生シンポジウム

(4) 新聞感想文コンクールへの参加

令和3年度は、神戸新聞主催「新聞感想文コンクール」、日本新聞協会主催「いっしょに読もう!新聞コンクール」のいずれかに、2年生普通科全生徒が夏季休業中の課題として取り組んだ。「新聞感想文コンクール」では、小・中・高校の学校応募7,585点、個人応募65点の計7,650点の中から「高校生の部」で2名が入選(「平等と安心」「沖縄の涙を感じる」)、「いっしょに読もう!新聞コンクール」では、高校・高等専門学校生29,897点の中から、1名が奨励賞(「病の語り」に導かれーあなたのこと覚えているー)を受賞した。

(5) 2021年度兵庫県NIE実践発表会高校生シンポジウムへの参加

令和4年2月によみうり神戸ホールで予定されていた「2021年度兵庫県NIE実践発表会」は感染症拡大のため、中止になったが、3月16日(水)に、NIE継続実践校の県立神戸高塚高等学校、県立西宮高等学校、県立多可高等学校、本校4校10名の生徒によるシンポジウムがオンライン(非公開)で開催された。テーマは、「ifこの世に新聞がなかったら～アフターコロナの時代を生きる・NIEの活かし方～」で、各校生徒が、新聞の活用頻度や興味のある記事、実践校指定後にどのようなNIEの授業を受けてきたかについて意見交換を行った。本校からは、1年生女子と2年生男子がパネリストとして登壇した(写真6)。

4 おわりに

活動終了後のアンケートで、94%の生徒から「新聞ワークに積極的に参加した」と肯定的な回答を得た。また、NIEの活動で「読解力」、「表現力」、「文章力」が身に付き、「社会への関心が高まった」という回答が上位を占めた。初めは新聞記事を読むのを苦痛に感じていた生徒のなかにも、「発表を終える頃には記事を読むのが楽しくなってきた」、「普段から創造的な思考ができるようになった」と新聞記事を活用した探究活動が有益であったことがうかがえる感想が見受けられた。令和3年度で実践指定校としての活動は終了したが、今後もNIEの手法や記者派遣等の事業を活用しながら探究学習を充実させていきたい。

「学びに向かう力」を育む新聞活用

兵庫県立明石西高等学校 校長 檜木 直人
教諭 上田 多江子

1. はじめに

本校は明石市西部に位置する全日制高校であり、普通科7クラス（そのうち1クラスは教育類型）と、国際人間科1クラスを設置しています。

今年度はNIE実践指定校となって2年目で、多くは昨年度の実践内容を踏襲したものです。昨年度と内容が重なるところが多いですが、今年度の実践を紹介します。

2. 新聞活用実践①NIEコーナーの設置

昨年度と同様、図書室前にNIEコーナーを設置しました。机の上に新聞を1週間分程度並び、生徒が座って見られるようにしました。今年度より、図書館の予算（学年費より徴収）で読売中高生新聞と朝日中高生新聞も購読し、一緒に並べています。

机の前の掲示板には、昨年度は教職員の選んだ記事を掲示していましたが、今年度はNIE担当の上田が毎日小学生新聞から選んで掲示しました。毎日小学生新聞は上田が自宅で購読しているものですが、生徒に読ませたい分かりやすい記事が多く、カラフルで掲示向きです。



(図書室前NIEコーナー)

掲示板の横にはホワイトボードを置き、図書委員にその日の新聞から記事を選んでコメントをつけてもらいました。記事選びをしてくれた図書委員の感想は、以下の通りです。

- ▶ 新聞を普段読んでいないから、今まで知らなかったことを多く知れて、深く考えることができた。
- ▶ 新聞は普段から読んでいるが、掲示用の記事を選ぶために読むことで、内容の理解がより深まった。
- ▶ コメントを書く際に、よく読まないといけないことを短く伝えようとするので、文を書く練習になった。
- ▶ 他の人が書いたコメントを読んで、こういう観点もあるのだという気づきがあり、面白かった。

3. 新聞活用実践②各教科での取り組み

各教科にも新聞活用を呼びかけ、今年度は以下のような実践がありました。

地歴 公民	「現代社会」の夏休み課題として、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募した。「政治・経済」「倫理」「地理」で、時事問題を紹介・解説した。
理科	科学的な記事（ノーベル賞受賞者の研究内容、コロナウイルスに対する免疫や検査方法など）を授業内容と結び付け、読解問題の資料として利用した。
芸術	「美術Ⅰ・Ⅱ」「絵画」「ビジュアルデザイン」で、ニュースになっている美術に関する事項を授業で取り上げ、鑑賞や課題の参考とした。
英語	「異文化理解」「時事英語」で The Japan Times Alpha から文化関連の記事を取り、授業で利用した。「情報＆コミュニケーション」で関心のある時事的な記事を選び、要約文やエッセー

	を英語で書いた。
家庭	保育分野において、男性の育児休業に関すること、紙おむつ事情、児童虐待などの記事を扱い、授業で活用した。
総合	日経新聞高校生特別版を生徒分取り寄せ、課題研究に向けての事前学習に用いた（国際人間科 1・2年）

4. 新聞活用実践③1年総合的な探究の時間

今年度も1年生普通科の「総合的な探究の時間」1単位を、新聞を活用する授業の中心として取り組みました。昨年度の授業担当者は、上田（情報科）と地歴公民科教諭2人でしたが、今年度は3名（理科・家庭科・情報科）追加して計5名で担当しました。分掌もばらばらで授業用の会議をするのは困難なため、授業内容をビデオにする、生徒が読めば活動できるプリントを作成する等の工夫をして、複数名で授業をしました。

「総合的な探究の時間」の授業のうち、新聞を活用した活動を以下に紹介します。

<新聞の回し読み>

新聞を自宅で購読していない生徒も多いため、まずは読んでもらう体験をしてもらうため、新聞の回し読みを行いました。

まず実際読む前に、毎日新聞の記者がYouTubeに公開している「【現役記者】新聞の読み方教えます!!」を見ます。

新聞の回し読みの手順は以下の通りです。

- ① 4人1班になり、4日分の朝刊を回し読みする（学校に配達されていた朝日・産経・神戸がすべて入るように配慮した）。一番興味深いと感じた記事に、それぞれが付箋を貼る。
- ② 4日分の記事の中で、一番興味深い記事を1つ選ぶ。
- ③ 2班で選ばれた記事を交換し、8人で一番興味深い記事を選ぶ。

クラスに5つずつ選ばれた記事は、次回の授業（スクラップノート作り）に利用しました。



（新聞回し読みの様子）

<スクラップノート作り>

前回の授業で選んだ記事4つを、授業担当者が8枚増し刷りし、生徒は自分達の班が選んだものとは違う記事をA4サイズのノートに貼り付けました。

生徒はその記事の内容を要約し、自分の意見を書きました。ノートはまた別の班の生徒に回して意見を書いてもらい、戻ってきたノートに再度自分の感想を書く作業を行いました。



（スクラップノート作りの様子）

生徒の感想の一部を以下に挙げます。

- 普段じっくりと新聞を読んで自分の意見を考える時間がないので、今回読んで自分達の身近な出来事や自分自身にも関わる内容のものも多くあったので、良い経験になりました。
- 意外におもしろい記事がたくさんあったので、また機会があれば読みたいと思います。



(生徒のスクラップノート)

<「神戸新聞の7日間」ビデオ視聴>

昨年度好評であった「阪神・淡路大震災から15年 神戸新聞の7日間 ～命と向き合った被災記者たちの闘い～」のDVDを、今年も視聴しました。震災や新聞に対して今まで縁がなかった生徒にも、災害直後の新聞記者や被災者の気持ちが身近に感じられるビデオです。

生徒の感想の一部を以下に挙げます。

- 生きているだけで奇跡なのに、お互いがお互いに助け合いながら前に進む姿に「私も頑張らないと」と思いました。当日の記者の方々が写真を残してくれたおかげで、私たちも知ることができているのだなと思いました。
- いざ被災者になって分かったことがあると言っていたように、自分が被災者になったときはもっともつとつらくて苦しいんだろうなと思うと、本当に地震というものは怖いものだと思います。また、こうして地震の怖さを伝えようと頑張ってくださいった新聞記者のみなさんに感謝しないとなと思いました。

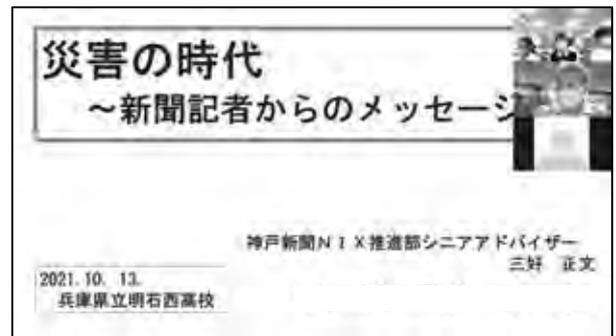


(「神戸新聞の7日間」視聴の様子)

<記者派遣>

昨年度は神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーを本校体育館にお招きして、1年生全員に対して「災害の時代」をテーマに出前授業をしていただきました。しかし今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、本校でも文化祭や体育大会が中止・代替行事となるなか、校外から人をお招きすることが難しい状況となりました。

そこで今年度は、私が授業を担当する1年2組を対象に、Zoomを使った遠隔授業を行っていただき、Zoomの機能で録画したものを他のクラスでも視聴することとなりました。



(Zoomの画面)

当日は生徒代表3人との対話もはさみながら、阪神・淡路大震災の経験や教訓をお話していただきました。生徒の感想の一部を以下に挙げます。

- 人々が作った大切なものを、地震等の自然災害によって一瞬で壊されてしまうのだなとあらためて思いました。
- 災害について知ることは自分の身を守ることにもつながると分かりました。
- 阪神・淡路大震災の淡路が付いている理由・大切さもよく分かり、考えが深まりました。
- 地域の新聞だからこそできることや、地域新聞にしかできない住民や県民に寄り添う姿勢があるということが分かりました。

<論文作りの参考文献>

2学期後半から3学期にかけて、「防災・災害」

にまつわるテーマを個々で決め、A4 サイズ 1 枚程度のミニ論文作りを行いました。参考文献は、書籍か新聞から選ぶこととし、参考文献からの引用と、引用した部分に対する考察を必須としています。

今年度は、「災害が起こった時、新聞を発行することはできるか」「新聞記事と災害に関係はあるのか」など、新聞と災害とのかかわりをテーマとして研究した生徒がいました。

昨年度、同じ授業で論文作りをした生徒たちが 2 年生となりましたが、1 年生での経験を活かしてグループでの課題研究に取り組んでくれています。

5. 高校生によるシンポジウム

今年度が NIE 指定校 2 年目となる 5 校が参加する「高校生によるシンポジウム」が、3 月 16 日にオンラインで行われました。本校からは生徒会長・図書委員長の 2 名（ともに昨年度図書委員）が代表として参加しました。



（シンポジウムに参加する生徒の様子）

NIE の授業を受けて自分の考え方が変わった点として、本校生徒は「新聞の記事の感想をグループで言い合うことによって、自分の意見を客観視したり、他の人の視点を知ったりする機会となった」「『神戸新聞の 7 日間』の DVD を見て、緊急事態での新聞の大切さが分かった」と意見を述べていました。

シンポジウムに参加した生徒の感想は以下の通りです。

- 他の学校の実践を聞くことができ、新鮮だった。
- 自分の持っていない考え方を知れて、勉強になった。

6. 今後の展望

本校の NIE 指定校としての活動は今年度で終了となります。ですが、来年度新入生より新教育課程となり、探究的な学びはますます促進していかなくてはなりません。

来年度入学生より、本校では全生徒が iPad を購入し、ロイロノートを活用する予定です。生徒が新聞記事をスクラップしたり、教師から生徒の画面に新聞記事を投影したり、生徒同士がシンキングツールを用いて新聞記事の内容について考察したりすることが、これまでより容易にできる環境が整います。

この 2 年間で培った経験を来年度以降も継承・発展していきます。2 年間貴重な経験をする機会をいただき、ありがとうございました。

<参考文献>

【現役記者】新聞の読み方教えます！！

(<https://youtu.be/20b00Tuk49Q>)

読解力・表現力の養成を目指した新聞活用（山口県立下関南高等学校）

(https://nie.jp/report/selected/archive/20190220_012740.html)

新聞を活用した「地域社会学」への取組み

兵庫県立西宮高等学校 校長 萩原 健吉
教諭 宮垣 佳寿子

1. はじめに

本校は、六甲山系甲山の麓に位置し、関西学院大学上ヶ原キャンパスなどのある「文教地区」に所在する大変教育環境に恵まれた立地にある。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約 1,000 名の大規模校である。授業では単位制の特色を活かし、それぞれの興味、関心、進路に応じて共通教科はもちろん、商業をはじめ第 2 外国語、芸術等様々な特色ある選択科目を履修することができる。

NIE 推進事業では、新聞記事を活用した探究学習の実践に取り組む。「総合的な探究の時間」の中で、新聞を活用して「SDGs」を理解するとともに、「地域社会学」をテーマに、身近な地域社会での問題を発見し、新聞ポスターにまとめる協働学習を行った。

本校 2 年次生に対して行ったアンケート調査によると、新聞を購読している家庭は昨年より少し減り約 50% で、生徒の大半は情報をインターネットで得るなど、新聞を読む機会は減っている。教科「情報」の授業では、インターネットの情報は信憑性に欠けることもあるということに触れ、情報の正しい獲得の方法を指導し、意識啓発を図っている。

2. 図書室に新聞の閲覧コーナーを設置

NIE で届く新聞については司書の先生の協力を得て、図書室に新聞閲覧コーナーを設置している。各紙を比較することにより、1 面で扱われている記事の違いや、同じニュースでも新聞社の視点により表現方法が違うことが理解できる。図書室開館中であればいつでも記事を読むことができ、休み時間に熱心に読んでいる姿も見られた。新聞は、前期が 5 月から 9 月、後期が 10 月から 1 月の計 8 カ月に 3 紙が届き、本校で購入している 1 紙と合わせ計 4 紙を閲覧することができた。



3. 実践の内容

(1) 「新聞ポスター」の制作を通して

昨年度から、NIE 推進事業より多くの新聞を提供していただき、「リサーチ I・II」(総合的な探究の時間)で活用している。昨年度は、2 年次生が「課題研究」の研究テーマを模索

するために、1年次生は「SDGs」17分野の中から気になる課題を探究するために、新聞記事を探し、社会の動きを確認した。

今年度は、生徒が新聞を通して社会に目を向ける機会として、1年次「リサーチⅠ」の講座で「SDGs」の課題探究を実施した。今回はできるだけ多くの新聞の中から記事を見つけるよう指導した。

＜新聞講読の趣旨＞

- ①新聞記事の中から、テーマに沿った記事を探し出す目を養う。
- ②新聞記事を読解し、要旨をまとめる力を身につける。

＜授業のねらい＞

- ①「SDGs」の17分野から選んだテーマに関する新聞記事を選び、その記事に対する考えを意見文の中で述べる。
- ②社会で起きていることは地域でも起きていると考え地域における問題提起に繋げる。

＜学習活動＞

第1時：・新聞を配付。(1人2紙以上)新聞から得られる情報を分類、分析する。

新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。

- ・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「SDGs」17分野のどれにあてはまるか確認する。
- ・新聞ポスターのタイトルを決定する。(例：「コロナで動く経済新聞」)

第2時：・各自のテーマに沿って新聞記事を切り取る。

- ・A3×2のレイアウトを考える。意見文やイラスト等も含めてレイアウトを考える。
- ・意見文の下書きをする。



(新聞を読み、必要な記事を検索)

第3時：・意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。

- ・次時に発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく、自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。

- 1 なぜこのテーマを選んだか。
- 2 どのような記事を集めたか。

- 3 それはSDGsのどの分野か。
- 4 自分はどのように考えたか。
- 5 今後、研究したいことは何か。

第4時：1人2分程度で、班内で発表を行う。



(新聞ポスター班別発表会)

(2) 新聞記者派遣事業

NIE 新聞記者派遣事業として11月4日(木)日本経済新聞社神戸支社支局長の堀直樹様をお招きし「裏付けの大切さ」というテーマで2年次生対象にご講演いただきました。新聞記者という情報を提供する立場から、情報の裏付けを取ることの必要性についてお話しいただき、これから実施する「課題研究」において、正しい情報を集めることの難しさ、その重要性を学んだ。また、自らの研究の信憑性を高めるためには、信頼できる裏付けが必要であることも気づかせていただいた。



(記者派遣事業 講演会)

<生徒の感想より>

- ・自分はマスコミ関係の仕事に就きたいと思っているが、今の自分はマスメディアの活用方法を間違えていると思った。ネットに書かれているニュースを簡単に信じて、その情報を自分で正当化してしまっているからだ。もちろん、ネットのニュースに触れることが間違った行動であるとは思わないけれど、新聞やテレビの情報も照らし合わせて、何が正しいのかしっかりと考えなければならないと思った。これからの時代は、もっと多くの情報が流れるようになり、正誤を自分で見極める“自己判断力”を身につけていく必要があると思う。また、日々新聞を読んでいく中で、堀さんがおっしゃっていた「見出し」と「第1段落」に特に目を向けていきたい。

- ・私は今回の講演を聞いて、自分は心地よい情報（自分にとって都合のいい情報、興味のある情報）に囲まれているということに気づかされた。SNS を見ていると、世界の沢山のことを知ることができると思っているが、その情報はもしかしたら偏っているのかもしれない。また、情報を得るときに、その情報が正しいのかどうかという裏付けを他の情報を見て確認するだけでなく、出所がどこなのかをたどっていくのも大切だなと思った。無意識のうちに思い込んでしまわないように気をつけようと思った。沢山の情報があふれる現在、全ての情報を裁いていくことは不可能だが、自分から発信する情報だけでも誤りがないように、裏付けをとることを心掛けたい。
- ・自分にプラスになる情報だけを見て、視野が狭くなっているという部分にすごく納得しました。全てが全て正しい情報なのではなく、世の中には嘘が出回っていることに改めて恐怖を感じました。新聞に書いてあることであっても、1年後に間違いだとわかることがあることに驚きました。情報は速いことも大切だと思いますが、やはり、真実に近い正しい情報を得ることが一番大事だと思います。ネットでも、新聞でも、一つ一つの言葉には責任があり、その言葉で誰かの人生が変わってしまう怖さを知ることができました。

4. 成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力は持っているものの、その長所を活かして課題を発見し、自ら解決していこうという力を発揮できないでいる。その背景には、恵まれた家庭環境下で社会の動向に無関心であることがあげられる。そこで、“新聞”を活用して、その持てる力を引き出す授業を企画し取り組んだ。

ちょうど今、世界中で SDGs を目指す活動が重要となっている。SDGs の達成課題は、社会問題が一人ひとり、個人の問題であることを自覚するための最も効果的な課題であり、個人が個人的に、或いは、他と協働して取り組まなければならない身近に存在する問題である。今回、これを取り上げ、「新聞ポスター」を制作しながら、社会に目を向けさせようと考えた。最初、改めて新聞を手にした生徒たちは、ネットに比べてピンポイントでニュースを見つけることに苦戦しながら記事を探していた。しかし、自分が探している情報以外に興味深い記事を見つけ、特に、今まであまり関心のなかった政治や経済の問題に目を向ける機会が増えた。また、記者の取材記事や読者のコラムなど、ネットやテレビのニュースでは知り得ない情報が多くあり、新聞は面白いと再認識した生徒が多くみられた。さらに、地域での小さな出来事も意外にたくさん掲載されており、情報も細かくまとめられ読みやすいことにも気づいた。

今後は、「課題研究」をはじめ、様々なレポートや小論文等に新聞を裏付けとした内容や意見が述べられるよう、また、多くの教科で活用、実践していけるよう、さらに活動を深化していきたい。

多様な価値観に触れ、社会の変化に対応する

兵庫県立多可高等学校 校長 殿井 瑞穂

教諭 盛岡 宗太

植山 正彦

1 はじめに

本年度は、NIE 実践校に指定され、2 年目をむかえました。

実践 1 年目に設定したテーマ「現代社会に適応できる力を身につける」をさらに進めることを目標としました。そのために、授業や記者派遣事業等で生徒同士の話し合いの場を増やし、新聞から情報を得るだけでなく、他者との意見交換を通じて多様な価値観に触れさせることで、社会のさまざまな変化に対応する力を育成できるのではないかと考え、NIE の活動をおこないました。

2 新聞掲示の方法と工夫

「新聞閲覧コーナー」は昨年度に引き続いて、多くの生徒や職員の目につく放送室前に設けた。新入生に対しては、NIE 実践の意義や、「新聞閲覧コーナー」の場所を授業等も活用して、周知しました。

また、コーナー横のホワイトボードには、注目の記事を貼り出すだけでなく、生徒が読み比べができるよう、記事の掲示方法を考えたり、読み比べの際のポイントを書き出したりするなど工夫しました。



3 実践の内容

実践 2 年目は、「多様な価値観に触れることで、社会の変化に対応する力を育成する」という目標を達成するため、2 つの軸を設定しました。

1 つ目は、上述したように、他者との意見交換の場をできるだけ多く設定すること。2 つ目は、国内外を問わず、最新のニュース・最も注目されているニュースを取り上げることです。

この 2 つの軸を意識して、以下のような取り組みをおこないました。

(1) 授業での取り組み

①化学基礎（1年）

1 年生の化学基礎の授業では、「プラスチックごみの削減と再資源化に向けた、プラスチック資源循環促進法の施行」をテーマとして取り上げました。生徒は、これまでの授業内容を振り返りながら、新聞記事を読み、ワークシートに取り組みました。

・ワークシートの内容

1	プラスチックは何の原子からできている？
2	プラスチックの廃棄は、なぜ問題になる？
3	プラスチック資源循環促進法について、専門家（4名）はどう考えている？

普段の授業とは異なり、身近なプラスチックごみの削減問題を扱ったことで、こちらの予想よりも活発に生徒たちが取り組ん

でいました。また、4名の専門家それぞれの記事を読み比べることで、生徒たちは多様な考えに触れることができていました。

～化学基礎 授業風景①～



そのため、以下の流れで授業をおこなうことにより、小論文や面接対策につながるのではないかと考え、各新聞社から提供していただいた新聞を活用して、1年間授業をおこないました。

- ① 新聞記事を読む
- ↓
- ② 記事に対する、自分の考えを書く
- ↓
- ③ グループワークで、考えを共有する

記事内容としては、「東京オリンピック・パラリンピック」といったものから、「衆議院議員総選挙」にいたるまでさまざまなテーマを取り扱いました。

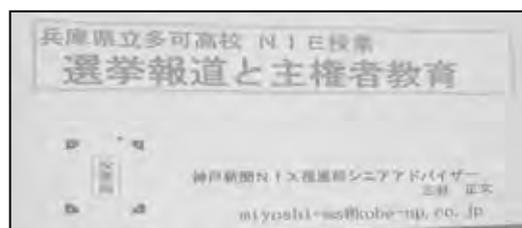
はじめは、自分の考えを記述できない生徒や、他者の考えをそのまま写してしまう生徒も多かったが、慣れてくると、特に指示しなくとも、議論をはじめめるグループも増えてきました。

また、面接対策に新聞を活用する生徒も出てくるなど、一定の成果が上がったように思います。

～化学基礎 授業風景②～



(2) NIE 授業



10月22日に、神戸新聞 NIX 推進部シニアアドバイザーの三好正文氏をお招きして「NIE 授業選挙報道と主権者教育」を、卒業を控える3年生の一部を対象とし、実施しました。7月におこなわれた兵庫県知事選挙の新聞報道を中心に、SDGs や防災などさまざまなテーマを扱いました。

若者の選挙離れが問題となっている現代において、選挙に行くことの大切さを知ってもらうために、代表生徒5名が「投票しないと、意見が届かないゲーム」に参加しました。

②現代社会研究（3年）

現代社会研究を受講する3年2組の生徒たちの進路選択の特徴として、進学希望者は小論文・面接を中心とした総合型選抜（旧 A0 入試）を利用する者がほとんどで、その他の生徒も就職希望者で、面接試験を控える生徒です。小論文入試についても、面接についても、自分の意見を記述、もしくは発言することが求められるようになってきている。

5名の生徒はそれぞれ、「18歳高校生」「24歳会社員」「45歳主婦」「65歳会社社長」「80歳高齢者」の役割を演じながら、各世代の投票率が少しでも変われば、実現不可能だった政策が実現可能になることなどを実感していました。

授業後の感想用紙には、

「ゲームが面白くて、投票率が少し変わるだけで、意見が反映されるか・されないかわってくるのか、と体験出来てよかった。」

「ゲームをして、実際には若者の意見は、政治にどの程度届いているのか不安になった。投票に行って自分の意見を示さないといけないと思った。」といった感想が多く寄せられ、有権者となる自覚や責任の重さを感じていました。

～ゲームの様子～



また、若者の選挙離れの一因として、誰に（どこに）投票すればいいのかわからないということがあげられます。そこで、生徒たちが、「子ども・子育て」「男女共同参画」「医療・保健」「観光振興」など、選挙の争点としてよくあげられる選択肢の中から、どの争点に関心があるかを選び、その理由をグループで共有し合い、発表しました。

三好氏からは、自分で選んだ争点について、新聞やネットを活用したり、各政党の主張の違いを調べたりして、自分の“引き出し”に入れてから選挙に臨むことが大切であるとアドバイスをいただきました。

生徒の中には、「私は保育士になりたい」と思い、今回の授業では「子育て」を争点に選び

ました。グループのみんなと意見交換して、いろいろな意見があるのだなと知ることができて勉強になった。選挙前には、自分の意見に近い候補者がいるかどうか調べてみたい。」と考えている者もいました。

～グループワークの様子～



(3) 記者派遣事業

3月17日に、まん延防止等重点措置の影響で、Zoomによるオンライン形式となりましたが、1年生全員を対象に記者派遣事業を実施しました。

テーマは「知っておきたいトレンドニュース」と「主権者教育」としました。

「知っておきたいトレンドニュース」では、ロシアのウクライナ侵攻に関する新聞記事を紐解きながら、新聞の特長についても解説していただきました。

また、(2)NIE授業と同様に、「主権者教育」をテーマに設定した理由として、この授業をうける1年生は、18歳で選挙権を持つとともに、成人となる世代でもあるので、早くから主権者としての自覚を芽生えさせたいという狙いがあったためです。

授業後の感想には、次のような記述がみられました。

「ニュースを知らないと生きられないというのは、本当にその通りだなと思いました。ニュースを読むようになってから、世界や日本は日々変化しているなど改めて実感できるようになりました。これからもニュースをたくさん見て、自分に今何が必要なのかしっかりと考え、少しでもいい社会、困っている人が

少ない世の中になるように私も協力できるようにしたいです。」

新型コロナウイルスの感染拡大、ウクライナ危機と、世界中が変化を実感する大きな出来事が続いており、これまでニュースにあまり関心のなかった生徒たちも、知っておかないとあらゆる変化に対応できないということが分かり始めているように感じました。

また、自分たちがどのように社会に貢献できるかを真剣に考えている生徒も散見され、この授業の中で、生徒の成長を実感することができました。

～記者派遣事業の様子～



4 2年間の実践指定を終えて

本校は、NIE 実践を通じて、新聞を活用し、他者と意見交換することで多様な価値観に触れ、社会の変化に対応できる力の育成を目指してきました。

本校でも、生徒の新聞に触れる機会が減っていているのが実情で、高校生によるシンポジウムでもあったように、新聞を購読する世帯も減少している現状をふまえると致し方ない。しかし、各教科の授業や総合的な探究の時間、ロングホームルームなどで新聞を扱ったことで、情報獲得・情報活用ツールとしての新聞の確かさを実感する生徒は増加していたように思います。

主体的・対話的な学びの重要性が叫ばれる教育現場において、読み比べ等ができる新聞の活用は大きな意味を持っているのではないかとも思いました。

NIE 活動の中で、生徒が様々な出来事に対して、他者の意見や考えを認めながら、主体的に話し合う姿が多く見られたことで、この2年間の実践も一定の成果を得たのではないのでしょうか。

ここで実践指定校としての期間は終わりますが、今後もこの取り組みを活かして、生徒が日々の変化を敏感に感じ取り、社会に目を向けていくよう、日々の教育活動をおこなっていきたいと考えます。



「やさしい日本語」新聞書き換え講座

兵庫県立伊川谷高等学校 校長 曾谷 功
教諭 福田 浩三

1 はじめに

新聞を身近に感じる機会が少なくなった近年、新聞を教材として活用することは生徒の

- ・情報を整理し理解する能力
- ・効率よく効果的に情報を発信する能力

の学習につながり、これからのグローバル化・情報化社会に必要なコミュニケーション能力の獲得につながるものである。

本校では以前より NIE 実践に取り組んでいたが、NIE 実践指定校となるにあたり、これまで単発で取り組んできた NIE 実践を相互に関連付けて体系化することにより、生徒により高い学習効果を与える試みを行った。

今回報告する NIE 実践の対象生徒は本校特色選抜入試で入学した 1 年生 30 名である。これら 30 名の生徒を本校では「コミュニケーション類型」と呼称し、1 年次に「総合的な探究の時間」の代わりに学校設定科目「コミュニケーション基礎（1 単位）」を受講する。本稿ではこの科目において行った NIE 実践について報告する。

2 実践について

文字による情報伝達は、文章表現によってその内容理解が大きく変化する。特にグローバル化が進む日本において、母語となる日本語を正しく理解し、より伝わりやすい形で文章表現することの重要性は今後増すばかりであると考えられる。そこで生徒が新聞記事を「やさしい日本語」を用いて書き直すことにより、母語である日本語についての理解を深めるとともに、文章の要点を簡潔明瞭にまとめ視覚的にも効果的に情報

が伝達される文章表現を日常的に意識できるようになることを目的とする。

「コミュニケーション基礎」における NIE 実践の流れを以下に示す。

① 新聞読み方講座（1 回）

※新聞購読 9 日間を含む

② ひょうご新聞感想文コンクール

（夏季休業課題）

③ やさしい日本語書き換え講座（4 回）

2-1 新聞読み方講座（R3. 6/25 1 回）

朝の読書の時間（毎朝 8:30～8:40）を活用し、9 日間（R3. 6/21～25, 7/13～16）地元新聞朝刊を購読することで、生徒に新聞に対する興味関心を持たせた（写真 1）。この新聞購読期間中に



写真 1 新聞購読中の様子

三好正文シニアアドバイザー（神戸新聞 NIX 推進部）による『新聞読み方講座』を実施し、新聞の持つ社会的役割や記事見出しの重要性などについて学習した。また、この講座の様子を伝える記事が後日同紙朝刊に掲載されたため、この

記事を生徒に読ませることで、自らの体験が記事になる過程と新聞の持つ表現の効果について考えさせた。

2-2 ひょうご新聞感想文コンクール

(夏季休業課題)

生徒が新聞紙面に目を通すだけでなく、興味を持った記事に関してその内容を掘り下げて熟読させることを目的に、「ひょうご新聞感想文コンクール(神戸新聞主催)」へ参加した。感想文を書くための新聞記事は、9日間購読した地元新聞または家庭で購読している新聞より興味を持ったものを活用した。

新聞感想文は夏季休業課題として課した。生徒は自ら選んだ記事に自分の意見を交えて感想文の形にまとめることにより、より相手に伝わる文章の表現力等について考えた。

提出された新聞感想文は授業担当者が校内選考を行い、2作品を「第12回ひょうご新聞感想文コンクール」に応募した。

2-3 やさしい日本語書き換え講座

(R3.9/10, 9/17, 9/24, 10/8 計4回)

これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に小さな子どもや日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的とし、「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換えを行った。

生徒が興味を持った新聞記事(「ひょうご新聞感想文コンクール」応募用に選んだ記事を活用)について「やさしい日本語」を用いてA5用紙にまとめ、その発表まで行った。講座全体を通して、アドバイザーとして塩川雅美特任教授(大阪市立大学 高等教育研究院)を迎え、指導助言をいただいた。

1回目 「やさしい日本語」講義 (R3.9.10)

塩川雅美特任教授の講義を通して、多文化共生社会における「やさしい日本語」の必要性について考えた。「やさしい日本語」のポイントと

なる「ワセダ式ハサミの法則」(わけて言う、せいで言う、だいたんに言う、ハッキリ言う、さいごまで言う、みじかく言う)について学習した。

講義の中で生徒は5人ずつ6つの班に分かれ、話し合いながら「やさしい日本語」の書き換え体験を行った。実際にある班が、

- ①令和3年 ②2021/9/10(金)
- ③14時~14時半 ④雨天決行

を「やさしい日本語」で書き直しを行った例を写真2に示す。

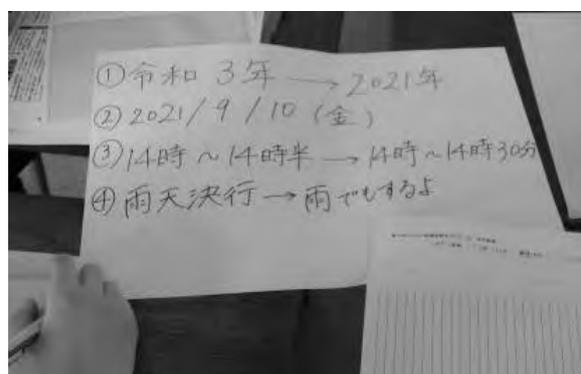


写真2 生徒が書き直した表現

2~3回目 書き換え作業 (R03.9/17, 9/24)

生徒が選んだ新聞記事を元に、その伝えたい内容や要約として必要な箇所を選び出す。そしてその内容を「やさしい日本語」を用いてA5用紙にまとめ直す。この際、新聞紙面を参考に、より内容が伝わりやすくなるように見出しや文言、紙面レイアウト等について検討した。書き換え作業は必要に応じて班内での意見交換やタブレットによる調べ学習を効果的に利用した。特に生徒は「やさしい日本語」を専門に扱うサイト(伝えるウェブ※)を積極的に活用していた。A5用紙はレイアウトの参考となる薄い罫線やマス目が入った「はがき新聞原稿用紙((公)理想教育財団)」を活用した。班ごとの書き換え作業の様子を写真3に示す。

※伝えるウェブ | やさしい日本語で情報発信
(<https://tsutaeru.cloud>)



写真3 書き換え作業の様子

4 回目 作品発表 (R3.10/8)

A5 用紙に書き直した紙面 (図1) を用いて、各自が興味を持った新聞記事の発表を行った。始めに6班に分かれて班内発表 (1人2分) を行い、その後各班より代表者1名を選出し、計6名の代表者がプロジェクタで拡大提示された自作品の紙面を用いて全体発表を行った (写真4)。発表で生徒は記事の興味を持った点に触れながら書き換え記事の読み上げを行い、書き換え時の工夫点等を説明した。発表を聴いた生徒の感想は、日報に記入させて回収した。



写真4 班代表者の発表

3 結果と考察

生徒各々が興味を持った新聞記事を活用したことにより、単なる文章の書き換えでなく、

- ・何を伝えたいか
- ・どう表現すれば伝わるか

に軸をおいた書き換えが行われた。書き換え作

業の時間として2時間の設定は少なかったが、それでも生徒は工夫しながら作品を仕上げた。感想等から生徒は「やさしい日本語」を通して、コミュニケーション時に必要な他者配慮について深く考え、新聞の紙面レイアウトから、他者の興味関心を引き出す方法について学んでいたことがわかった。ここで学んだ「やさしい日本語」は、以後の「テーマリサーチ」等の学習活動の中でもレポート作成や発表の中で活用された。書き換えを行った生徒の作品例を図1に示す。

「コミュニケーション基礎」では毎回、生徒に



図1 生徒が書き換えた紙面 (A5 サイズ)

日報の提出を求めている。その内容は、授業のメモや感想・気づきであるが、そこに記された生徒感想を資料1に記す。

資料1 生徒日報の感想 (抜粋)

[新聞読み方講座]

今回の授業を通して新聞に対しての見方が変わる瞬間が沢山ありました。簡単に変更できないから誤報になってしまわない様に念入りに下調べをして取材をしようと、私は軽く考えてたんだなあと感じた瞬間でした。他にも有事のライフラインである事、人命と人権を

守る役割を新聞が担っていたなんて初めて知りました。教えてもらって初めて気付く事が多くて今まで何とも思っていなかった新聞に興味を持てた1時間でした。

【やさしい日本語書き換え講座（講義）】

文をみじかく簡単にわかりやすく変えることで、自分も相手もわかりやすくなって読みやすくなりました。少し変えるだけでこんなに変わるんだと思いました。新聞も簡単に書けるようになりたいです。

【やさしい日本語書き換え講座（作業）】

構成を考えるのが難しかった。やさしい日本語にするべきかどうかの基準が分からなかった。書くのに時間がかかった。

【やさしい日本語書き換え講座（発表）】

日本語を簡単にすることにも、人それぞれの個性が出ていて、なおかつすごく工夫されていました。多くの人の前で発表するのは、少数の前よりも感覚が違い、緊張しました。

4 まとめ

ここまでの NIE 実践報告は、複数の実践内容を関連付けながら体系化して一つにまとめた例である。このように NIE 実践について当初は個々の目的で行った内容に対しても、年度を追うごとに関連付けを行い体系化していくことで、講座としての大きな道筋を得ることが可能となり、継続した新聞活用は生徒にとって取り組みの意欲向上につながったと考える。

本校では今回報告した実践例以外にも、

- ・ NIE ゲームを活用した見出しの表現効果
- ・ 新聞記事から SDGs を考えよう
- ・ 活字を楽しもう
- ・ 面白い広告を作ろう
- ・ 写真の喜怒哀楽を見つけよう
- ・ 新聞各紙を比べよう
- ・ 主権者教育

・ 震災教育

など、各学年において NIE 教育に取り組んでいる。実践内容は様々であるが、最近では「新聞記事の授業への活用」に加え「新聞の持つ表現力・情報発信力を学ぶ」ことにも着目している。

本稿で報告している「コミュニケーション類型」では令和3年度、「コミュニケーション基礎」1~3時間の授業につき1号の割合で「類型納得通信（B4両面カラー）」を計14号発行した。この通信は新聞紙面を模して制作しており、その記事は授業の様子、振り返り、補足、感想等からなっている。また同様に、2学年においては毎週「学年通信（B4両面カラー）」を計33号発行し、生徒の日常生活を保護者や教職員に伝えた。これらも生徒の NIE 教育の一環に役立っていると考える。



図 2 類型納得通信（表面）

【 特別支援学校 】

新しい視点で社会を見つめる

～特別支援学校における新聞を使った取り組み～

兵庫県立播磨特別支援学校 校長 下雅意 一之
教諭 天野 利佳

1. はじめに

本校は普通科、職業科、就業技術科の3科をもつ高等特別支援学校である。普通科、職業科は肢体不自由の生徒たちが学んでおり、3学年29名の生徒全員が寄宿舎生活を送っている。一方、就業技術科は知的障害のある生徒91名が企業就労を目標に通学している。今回NIEに取り組んだのは、このうち2年生の普通科・職業科の生徒7名である。

先ほど述べたように、7名の生徒たちは寄宿舎生活を送っている。そのため社会の流れと一部切り離された環境の中で生活しているという実態がある。生徒たちが情報を得るための手立てはほとんどがインターネットであり、紙媒体である新聞を読むことはまれである。

しかし、生徒の多くが企業就労を希望しており、障害からくる経験の少なさを知識で補ってゆく必要があることも事実である。その点からも、新聞を活用した教育活動は大きな意味を持つものであると考えた。

2. 取り組みの内容

1年目のねらいの一つに、生徒たちの情報源として、新聞を身近なものにすることがあった。

まず、生徒たちが新聞を敬遠する理由を知るため、簡単なアンケートを行った。生徒たちに対する質問項目は大きく二つ、「あなたほどのくらい新聞を読みますか。」「新聞の記事を話題にすることはありますか。」というものであった。一つ目の質問に関しては全員が「読

まない」「あまり読まない」と答えた。理由は、「興味がない」「読むのが難しい」「読むのが面倒」「身近に新聞がない」ということだった。

二つ目の質問に関しては、「あまり話題にしない」「話題にすることはない」という答えだった。この結果を受けて、まずは健常の子どもたちが当たり前に行えること、「新聞をめくり読むこと」をさせてみた。空間認知の問題を抱える生徒たちにとっては、新聞記事の独特な配置の仕方に慣れることもクリアすべき課題であることがわかった。

(1) 新聞に興味を持たせる環境づくり

当初は新聞記事を読ませ、話し合いをさせたり、それをスピーチにつなげたりする計画であった。しかし、生徒たちが新聞紙の扱いに苦労する姿や記事の配置がわからず、うまく読めない課題があることがわかったため大きく軌道修正をすることにした。具体的には、「社会の動きを見てわかるようにする」ため、生徒が日々新聞にふれることができるよう工夫をした。それが「新聞の木」である。



新聞の木

「新聞の木」は、はじめは各社の1面の見出しを見比べることから始めた。しかし、コロナや選挙など大きな差が見られない日もあったため、地域のニュースや社会面のニュースなどを盛り込むようにした。本校には朝の学習時間がある。その時間を活用し、気になる記事や見出しに小さなシールを貼るよう呼びかけた。新聞を読むことには抵抗感を示した生徒たちであったが、シール貼りはハードルが低かったらしく、進んでシールを貼る姿が見られた。1カ月を過ぎるころには、はじめは見出しだけであったものが、記事全部をのせることができるようになった。興味を引く記事については教師に話しかけたり、教師の意見を聞きたがったりする生徒も出てきた。

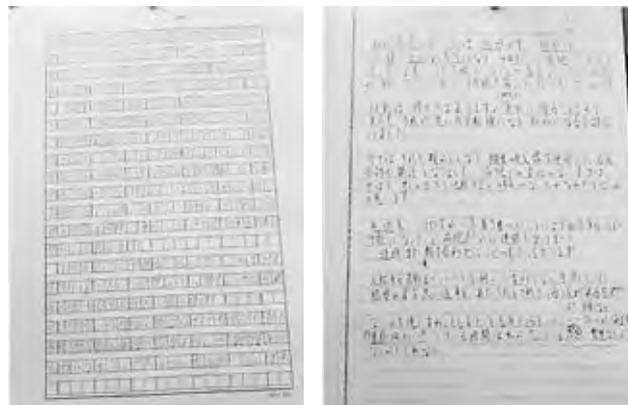


新聞の木を掲示している廊下の様子

(2) 1分間スピーチ

本校では、朝の学習に加え、終わりのホームルームで「1分間スピーチ」を行っている。これに、新聞記事の内容を盛り込むようにした。例えば、ウィズコロナやゼロコロナについて書かれた記事を読み、「あなたはゼロコロナ？ウィズコロナ？」と題した意見文を書かせ発表させた。また、10月31日の選挙を受けて、「18歳になったら選挙に行く？行かない？」というスピーチも行った。もちろん選挙には行ってほしいのだが、今回これについては指導を控え、選挙についてどう思っているのかを生徒たち自身が考えるきっかけとした。ス

ピーチについては見本を2パターン以上用意するようにし、文章を書くことに対する抵抗感を薄めることにも配慮した。



生徒のスピーチ原稿

(3) 記者派遣事業

今年は、記者の方に来ていただき、「新聞事始め」「震災について」というテーマで、2度話をうかがった。取材から新聞が配達されるまでの基本的な話や新聞の見方、読み方などの話、阪神・淡路大震災当時の様子、障害のある人たちが避難所生活で苦勞したことなどわかりやすい中にも緊張感のある話をうかがうことができた。



10月記者派遣事業の様子

1回目のお話では、生徒たちからは、「報道するときや記事にするとき注意しないといけないことは何か」「記事を作るとき何を意識して書くのか」といった質問があり、新聞の特徴

としての「網羅性、一覧性、信頼性」について話をお聞きすることができた。どちらも2時間の予定であったが、生徒たちは、時間いっぱいしっかりと話を聞いていた。

(4) 自立活動

「自立活動」は特別支援学校の教科になる。生徒の障害やニーズに応じて一人ひとりに合わせた取り組みを行っている。NIEの趣旨とは異なるが、新聞を活用した自立活動を行っているので一部を紹介しておく。

・新聞を使ったちぎり絵

肢体不自由の生徒たちにとって手指を使う作業は必須のトレーニングである。手を切ることのない、また破りやすい新聞は生徒たちにとっては非常に有効な教材となる。

・新聞くくり

新聞を使って縦横に紐をかける練習を行っている。生活自立を目指す生徒たちにとってはこれもやっておかないといけない生活動作の一つである。

このように本来のNIEの取り組みからは外れる内容であるが、本校では読み終わった新聞を活用し、生活の質(QOL)の向上のためトレーニングを行っている。

3. 生徒の変化

(1) 2回目のアンケート結果から見た生徒の変化

9月6日実施のアンケートでは、「新聞を読むか」という問いに対し、全員が「読まない」「あまり読まない」と答えていたが、11月26日実施の同じアンケートでは「時々読む」と答えた生徒が71%に増えた。一方で、「新聞の記事を話題にするか」という問いに対しては、ほとんど変化が見られず、「あまり話題にしない」「話題にしない」と答えた生徒が大半を占め

た。この結果から、生徒たちは授業の取り組みの中では新聞を読むようになってきたが、日常生活の中では新聞がまだ情報共有のツールとはなっていないことがわかった。

しかし、一人ひとりの変化を見てみると、「一面の記事(見出しも含めて)は見るようになった」(86%)、「社会の出来事を意識するようになった」(29%)、「授業の中で話が出たときにわかるようになった」(29%)、「新聞の中に出てくる漢字が少し読めるようになった」(29%)など、自分自身の変化を感じている生徒が一定数出てきていることもわかった。

NIEの学習前と学習後で変わったことがあれば○をつけてください。

①新聞の記事やニュースを覚えるようになった。									0
②社会の出来事を意識するようになった。	○								2
③新聞の記事を話したりと共有できるようになった。									0
④新聞をよく読むようになった。									2
⑤一面の記事(見出しも含めて)は見るようになった。	○	○	○	○	○	○	○	○	6
⑥一面の記事(見出しも含めて)は読めるようになった。				○					1
⑦授業の中で話が出た時にわかるようになった。					○				2
⑧授業の中で話が出た時に話の主人公と気づくようになった。					○				1
⑨新聞の字に当てはまる漢字が読めるようになった。									0
⑩新聞の中で出てくる漢字が少し読めるようになった。							○		2
⑪その他、自分自身の変化があれば書きましょう。									1

(2) スピーチ内容の深まり

今回NIEの学習に取り組んでいる7名の生徒たちは、自分たちの意見をまとめて人前で発表することを苦手としていた。中学校時代にはほとんど人と話すことのなかった生徒や話そうとすると声が震える生徒もいる。その生徒たちが日々の授業に加え、NIEの学習に取り組むことで少しずつではあるが変化を見せ始めている。1分間スピーチの内容の深まりがその一つである。生徒のスピーチの一部を紹介する。

・私はウィズコロナを支持します。…今だってゼロコロナになっていません。ゼロコロナを目指すならば私たち学生は学校行事、部活動ができなくなります。…こんなことをいつまでも続けるよりは、マスク、手洗いで予防しながら部活動や学校行事ができたりする方がいいと思います。

・私は、ゼロコロナを支持します。なぜならこれ以上医療機関の負担を大きくしたくないからです。…コロナがまだはやっていないときは、家族と普通に面会できていたのに、今はコロナが増えてきているので、人数も制限されて入れない状態です。

(3) 学校全体の変化

学校はこれまでもさまざまな形で新聞を教育活動に活用してきた。しかし、今回多くの生徒の目に触れる形で NIE に取り組んだこともあり、寄宿舎や保健室の廊下前などに新聞が掲示される機会が増えた。実際に授業でも活用していると記録を残してくれている教員もいるので、一部を紹介する。

・就業技術科（知的障害）

（授業名）コミュニケーション

（授業形態）話し合い・ディベート

（テーマ）人生案内 「ながらスマホ」に強い嫌悪感

・就業技術科（知的障害）

（授業名）コミュニケーション

（授業形態）調べ学習ほか

（テーマ）天声人語 書き写し 語句調べ
要約→発表

4. 今後の展望と課題

今、NIEに取り組んでいる2年生は、4月になると3年生になり社会に出るまであと1年しか残っていない。「もっと社会の動きに目を向けてほしい」「自立に向けて取り組んでほしい」というのが、我々教員の本音である。しかし、日常生活や学習の様子を見ていると、素直に話は聞くけれど自分の意見は言えない生徒、何気ない会話が苦手で雑談のできない生徒が多い。これら生徒たちを助けることになるのが新聞をはじめとする多くのメディアから得られる情報である。中でも信頼度の高い新聞

はぜひ読む習慣をつけてほしい。

この1年の取り組みで、生徒たちの中に情報を受信する素地はできた。しかし、まだ積極的に情報を得ようとする姿勢は身につけていない。それがアンケート結果によく出ている。与えられたことにはまじめに取り組むが、自分から探したり、見つけたり、話したりする力が弱いのである。社会の出来事にどれだけ興味と関心を持ち、周囲に発信できるようになるかが課題であると考えます。

また2022年度は、普通科・職業科の生徒だけでなく、企業就労を目標に日々の授業に励んでいる就業技術科の生徒を活動に参加させていきたいと考えている。3年生となる生徒たちが、新聞をはじめとする社会の情報に目を向け、自分が興味・関心を持った出来事について、人と会話をしたり、意見を述べたりできるよう活動を充実させていきたい。



Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2021（令和3）年度
『兵庫県N I E実践報告書』

—2022（令和4）年5月発行—

兵庫県N I E推進協議会 編

〒650-8571

神戸市中央区東川崎町1-5-7

神戸新聞社読者本部内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/>

「教育に新聞を」実践 特別支援学校編

◇新しい視点で社会を見つめる ～特別支援学校における新聞を使った取り組み～

(兵庫県立播磨特別支援学校)

「教育に新聞を」実践 中学校編

◇NIE ノートを通して、見える世界と関わる自分

～SDGs 教育プログラムの実践、万博 EXPO2025 を見据えて～

(西宮市立浜脇中学校)

◇未来を切り拓き、生き抜く資質・能力の育成

(兵庫教育大学附属中学校)

◇新聞を活用した情報リテラシー教育実践

(神戸市立神陵台中学校)

◇新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る

(尼崎市立南武庫之荘中学校)

◇NIE 活動を通して、時事問題に興味・関心を持たせ、主体的に学習を深めようとする態度の育成

(加古川市立志方中学校)

「教育に新聞を」実践 小学校編

◇新聞から広がる世界～これ、みつけたよ！おもしろいね～

(伊丹市立天神川小学校)

◇社会に目を開き、自分の考えをもち、発信できる子供の育成

(神戸市立大沢小学校)

◇新聞の魅力を味わい、新聞を楽しく読もう

～自分の興味・関心に合わせて新聞を進んで活用していくことのできる児童の育成～

(神戸市立淡河小学校)

◇新聞を通して、社会への関心を高める取り組み

(尼崎市立立花南小学校)

◇「読む」「感じる」「伝え合う」力の育成をめざして

(養父市立宿南小学校)